

「巻き込まれ親父の憂鬱」

作 藤次郎政秀

●プロローグ、あの日はもえたわ…

「いらつしやいませ」

白山亭の扉を開けると、店内の女給が笑顔で応対した。

「H G社長様はおりますでしょうか？」

「はい、カウンターに…ご案内いたします」

「ありがとうございます」

B 侯爵付第一秘書T Kは白山亭内のバーカウンターを見ると、既に先客が居た。

「H G社長おゝA M様はわあゝ？」

「暫く、任務に就いてるから居ないよ」

「エエー、どこですか？」

「教えられない…守秘義務！」

「ネーエ、教えて下さいよう」

バーカウンターでH Gに昼間から縋りつくように絡んでいるのはD 国大使館付エージェント機関D S F所属のM Z

「…お前さん…もしかして昼間から飲んでる？」

M Zの口調に彼女がお酒を飲んでいないことを知って、H Gが言うと、

「飲んでいません！」

とM Zは真顔で否定した。

M ZがH Gにベッタリ絡んでいるので、T Kはどう割り込んでいいのか分からず、M Zの後ろで不機嫌な顔で佇んでいると、

「あつ、TKさんいらっしやいませ」

と、HGから声を掛けられた。TKは（HG社長に気づいて貰えましたわ。嬉しい！）と途端にご機嫌になり、MZの隣の席を勧められる前に自ら座り、

「HG社長…こんにちは。MZ様、ごきげんよう（前半にこやかに…後半冷たく。作者注）」と挨拶した。MZは横に座ったTKを確認し、挨拶を受けると

「あら、B侯爵秘書さん、ごきげんよう」

と挨拶を返した。

HGはTKにメニューを見せて、

「ご注文は？」

「ハイ、白山亭オリジナルコーヒーをお願いしますわ」

と、TKはHGに対しては乙女のように振る舞う。

「畏まりました」

HGが淹れたコーヒーを飲みながら、TKが

「あのー、HG社長…チョットよろしいですか？」

と上目遣いで言った。

「何でしょうか？」

HGの返答に、TKはモジモジしながら

「…実は、この前の雑居ビルでの事で…（巻き込まれ親父の邂逅」参照）」

「ナニナニ、なにかありましたの？」

TKとHGに何かあると思ったMZがグイグイ来た。そんなMZを無視してTKは、顔を赤らめて俯き、

「あのう…使った後…なんか緩くなったと言いますか…ガタが来たと言いますか…何か違

和感がありまして…」

と言うと、

「マッ！」

MZはTKの言葉に口を手で隠した。

「やはり、トシかしら…」

TKはシュンとして言った。

「あー、あの時ですか？無理させましたかね？」

HGも困った様な口調で返す。

「エエー！？（TK様も年増ですからねえ…それはいきなり…）」

MZは勝手にあらぬ想像をしてHGに向かって

「マアゝHG社長、B侯爵秘書様とナニをなさってたの？」

と訊ねた。HGはこのパツキン(MZ)…何か勘違いしていないか？少しいじってやろう

…と考え、

「…何って…（マフィアと）ドンパチしたけど…そうですよねTKさん」

HGはTKに優しく聞くと、

「ハイ…（雑居ビルではHG社長の前ではしたくない真似を…思い出しても恥ずかしい…）」
と、しおらしく返事をして、TKは頬を赤らめて俯く。

TKの態度に（ンマアー、なんて事を…嫌らしい…）と益々変な想像をして、MZは顔を赤らめる。HGは（しめしめ…）と思つて、

「こちらは、飲食店ですので、後で裏に行きましようか？」

「ハイ」

TKが嬉しそうに答えるのを聞いたMZは（えゝ、これから、また…まだ明るい内に…）
とまた変な想像をした。

「T T、休憩から戻りました」

白山亭のバーカウンター横の従業員出入り口からT Tがバーカウンターに入ると、目の前に居るT Kを見つけて（また来たの？）という目でT Kを睨む。T KはT Kで睨むT Tに（あらあ…来ちゃいけませんの）と涼しげな表情で対抗する。傍から見ていたM Zは（いつものT Tさんと違う、怖い！）と怯えた。

「おう、T T丁度良かった…これからT Kさんの拳銃がおかしいと言うので、工場に行って見てみるから、代わってくれ！」

「あつ、はい、畏まりました」

T TはT Kに向けていた敵意を不意に解いて慌ててH Gに返事をする。

「えっ？…拳銃の話？」

M Zが目を点にしてH Gに訊ねる

「そうだよ！何だと思った？」

とH Gは怪訝そうに答えた。

「…いつ、いえっ…私はただ…」

と言って、M Zは口ごもった。

「なんだ？M Zさん…欲求不満かね？」

とH Gがからかうように言くと、

「そつ、そんな事…セクハラですわ」

と、顔を赤くして否定した。

H GがT Kを連れてバーカウンター横の従業員出入り口から出て行くのを見送ったM Z、T Tに向き直って、縋る様に、

「ねえーT Tさん、A M様の任務先教えてえ〜！」

と訊ねると、T TはH GがT Kを連れて行った事に嫉妬を覚え、その八つ当たりもあり、

「ダメです！」

とバシッと言った。

「ケチー(泣)」

●碇屋ガンスミス

T Kの拳銃を預かり、ラックから、T Kの拳銃の取扱説明書取り出して、一通り見てから、T Kの目の前で拳銃のスライドを動かして

「…確かに、ガタついてますね。いつ気づきましたか？」

「あの時の後、使ったので、お掃除しようとしてテイクダウンしようとした時ですわ」

「で、テイクダウンはしたのですか？」

「…いえ、薬室内の残弾を抜いた後に引っこかりを感じたので、何かあると怖いので、専門家に診ていただこうかと…」

「それは、正しいと思います。スライドのかみ合わせと言うより、中のリコイルスプリングがバレルかスライドに引っかかっているようですね。…ちなみに、チャンバー内に弾は？」

「残っていませんわ…」

「そうですか」

と言って、H Gは工場の隅に行き、ドラム缶状の装置の蓋を開けて、T Kの拳銃をセットし、蓋を閉めて、装置の紐を引く。「カチン！」と言う乾いた音を確認して、H Gは装置の蓋を開ける。H Gの後ろからT Kが覗き込むと、装置の奥には砂が入っていて、H Gが引いた装置の紐は装置の中でT Kの拳銃のトリガーに掛かっていた。

「…スミマセン、T Kさんを疑っているわけではありませんが…仕事柄念のために…」

とH Gが後ろから覗き込んでいるT Kに言うと、

「いえいえ、火薬を扱っているのですから、用心に越した事ありませんわ。…それに、[〃]特別銃器携帯・使用許可証[〃]の試験にも出ますから」

と言った。H Gは装置からT Kの拳銃を取り出し、作業台に置いて、テイクダウンを始めた。スライドをフレームから慎重に外すと、中にあるバレルを覆う様に囲っているリコイルスプリングを外し、それを見る。

「…リコイルスプリングが痛んでいますね、最後にテイクダウンしたのはいつですか？」

H Gの質問に遠い目をしているT K…それを見てH Gは

「記憶が無い程ですか？」

H Gの言葉にハツとして、

「…お恥ずかしい限りです…（どうしましょ…H G社長に嫌われるー）」

T Kはシュンとして答えた。

「まあ…貴女のような任務ですと、基本、これ（拳銃）を抜かない方がいいのですよ」

「はい…」

「でも、たまにはこの子（T Kの拳銃）を使ってあげませんかね…」

「はい…」

とT Kが落ち込んでいる間に、H GはT Kの拳銃を完全に分解してしまった。それを見たT

Kは、

「手慣れていらっしゃるのね」

と驚きの表情で言うT Kに

「はは…仕事ですから…」

とH Gは笑って答えた。作業台の上で完全に分解されたT Kの拳銃…それを見たT Kは、

「そこまで…」

と驚いた。

「はい…これから、部品の研磨とか劣化している部品の交換…グリスアップ等を行います」
と言ってHGはTKの拳銃の取扱説明書を見て交換する部品の選定とか、スライドとフレームの擦り合わせを見たりしていた。

一通り修理と調整が済むと、

「メンテナンスと射撃の練習に、たまにはウチ（碓屋ガンスミス）に来てください…貴女の持っている古い拳銃の取扱説明書を持っているガンスミスは他には滅多にありませんから…」

と言った。

…HGとSKは約30年昔から趣味とアルバイトでガンスミスの仕事をしていた…そのため、古い拳銃の取扱説明書を多く持っています。作者

「ハイ！（嬉しい…HG社長からお誘い受けちゃった!）」

HGは組み上がったTKの拳銃を提示して、それから弾薬の入っている金庫からTKの拳銃に使用する弾（TKの拳銃はHG達の使用する拳銃より小口径の・32口径）を一箱出すと

「これから、試射に行きますが、一緒にしますか？」

「ハイ…是非!」

とTKがウキウキして返事をした時に、

「よう…HG、お客さんかい？」

ガンスミスのある男屋の奥のボイラー室から出てきたSKがTKの姿を見て言った。

「やあSK…そうだ、この方を紹介するよ…彼女はTKさんと言って、B侯爵秘書さんだ」

「それは、初めましてSKです」

「初めましてTKです」

「S K、この方は昔、O島の戦線に行っていた時にお会いした方なんだよ」

「「え」」

T KもS Kと共にH Gの言葉に首を捻った

「…ほら、O島上陸後に補給基地に向かう途中で駆逐装輪車に乗せた方だよ」

「そうだったの？」

S KはまだO島の事を思い出せず、H Gの話が分からない様だった。それを見てH Gは残念そうに

「…忘れてたか…T Kさん、こいつはあの時、駆逐装輪車の運転手をしていました」

「そうだったのですか!？」

T KがS Kを見て驚く。

「あと…今日はまだ店に来ていませんが、白山亭の夜のP u b営業でマスターをしているI Iと言う者が居ます。彼もあの日駆逐装輪車で通信手兼装填手をしていました」

「…マァ、あの日の私の命の恩人の方々がここに居るのですね！なんて偶然でしょう…」
とT Kは手を合わせて喜んだ。

●殺人許可証とバトルジャンキー

港町警察署の受付で、H Gが射撃場の使用許可願いをいつもの様に記入していると、受付の馴染みの女性警察官K Tに

「H G社長、後ろの方は？」

とH Gの後ろに居るT Kについて訊ねられて、H Gは

「あつ、ウチのお客様。お預かりしたこちらのお客様の拳銃の試射に来ました」

とT Kを紹介した。K TはT Kに

「と、言う事は、そちら（T K）は『特別銃器携帯・使用許可証』を持っていますよね…見

せてもらいますか？決まりですので」

と言うと、TKは、持っていたポーチから特別銃器携帯・使用許可証を取り出し、受付に提示した。

それを見た受付のKTは途端に蒼くなった…HGが不審に思っ、TKの提示した特別銃器携帯・使用許可証を覗くと、普段見慣れた特別銃器携帯・使用許可証の使用銃器種別のマークの拳銃の欄に〃〇〃が入っているのとは別に、特別に追加された欄があり、箇所〃M〃と記載の欄があり、そこにも〃〇〃が入って居た。（まさかこれが、皇族関係者や国家公安局員が持っていると言われている…〃殺人許可証〃？…初めて見た）とHGは驚いた。

「あ、あっ…ご提示ありがとうございます。どうぞおしまい下さい！」

受付のKTは蒼くなつたまま、急に丁寧な言葉で対応した。

TKはニツコリと笑って、特別銃器携帯・使用許可証をしまった。

TKは射撃場のシューティングレンジでメンテナンスが済んだ自分の拳銃の試射を行い、HGの微調整を受ける。TKの拳銃の腕前は、流石殺人許可証を持っているだけに正確であった。

「どうです？」

TKはHGの質問に、HGのメンテナンスですっかり元の調子を取り戻した愛銃を愛おし気に撫ぜながら、うっとりとした表情で

「ああ…あなた（拳銃の事）…HG社長にこんなに良くしていただいて…羨ましいわ…」
と言った。それを聞いたHG（…やはり、この人、バトルジャンキーだ…）と思ってドン引きした。

●指名警護依頼

「よく来てくれたY…」

「…」

B 侯爵が I Y に対して名を呼んだのに対して I Y は無言だった。

B 侯爵から I Y に対する指名の警護依頼が碇屋にあり、H G は I Y を連れて B 侯爵邸に赴いた。B 侯爵邸の客室で B 侯爵と B 侯爵秘書の T K、その向かいの席に H G と I Y が座る。

「早速依頼につきましてご説明いたします」

B 侯爵付第一秘書の T K が説明を始める。H G は先日のバトルジャンキーモードの T K と打って変わって氷の様に冷たい秘書モードの T K を久々に見た気がした。

「来週、C 国皇帝陛下の御尊孫の Q 姫様が帝都国際空港に御来皇されます。御来皇の目的は、王城宮殿内での皇王陛下とのご接見ならびに皇帝陛下からの親書の奏上。続いて皇王陛下主催の晩餐会ご出席。翌日、皇立大学にて同名誉教授 X 様による講演会にご出席や同大学での音楽鑑賞ならびに学生達とのディスカッション、それ以降は皇国各地での各種式典にご出席あそばされ、一度帝都にお戻りになり、この後帝都国際空港から母国 C 国にお帰りあそばされます。滞在期間は 1 週間になります。帝都滞在中は、皇王省（日本の宮内庁に相当）敷地内にある迎賓館に御宿泊されます。スケジュールは、こちらになります（どうです。

H G 社長：今の私決まっていますでしょ！」

と言って、T K はテーブルの上にスケジュール表を提示した。

B 侯爵自ら口を開く

「H G 社長、この度の依頼は我が皇国の威信が掛かっています。皇国としまして無論警護のシークレットサービスを付けますし、皇国国家公安局からも人を出しますが、24 時間 Q 姫様に従いボディガードとして皇王様のおられる王城内の宮殿に上がる事が出来る人材は当家の Y 以外におりません。皇王陛下たつてのご依頼ですので、この任務を是非とも Y に受けていただきたいのです。よろしいでしょうか？」

B 侯爵の真剣な表情に、驚きを隠しつつ、H G は

「B侯爵様…伺ってもよろしいでしょうか？」

「はい、必要であれば」

「過去にもC国皇帝陛下御本人、皇太子殿下やその御弟君殿下を始めとして、C国皇帝家の方々は度々本国に御来皇されています。なぜ、Q姫様だけこの様に警護を厳重にされるのですか？」

「…成程。その質問は的確ですね。確かにH G社長が仰る様に、C国皇帝家の方々は度々本国に御来皇されています。その時の警護と同じで十分ではないかと言う疑念もごもつともです。でも、Q姫様に限って言えば、今までの警護では不十分なのです」

「どういうことですか？」

「昨年Q姫様がE連邦を御訪問された際、E連邦王室主催の式典中にQ姫様が警護の隙について逃げ…いや御退去遊ばされ、危うくE連邦王室の威信を落としかけた事があります…とにかくQ姫様はその国の庶民の暮らしに御関心が強く、目を離すとすぐに街中に出て行かれるお方なのです…」

「皇帝陛下の御孫様なら、庶民の暮らしを知るのも大きな勉強なのでは？」

「…そのこと自体は私も同じ考えですが、その行動自体が問題なのです…Q姫様は『私はいずれ庶民に降嫁するのですから、C国に限らず広く世界を知りたいのです』と仰せで…警護の者を一切つけずに街中を気ままに行動なさるのです。今回の御来皇のスケジュールに…」

「…ですね」

「…と言つて、B侯爵はTKの置いたスケジュール表を自ら捲つて指し示し、
「帝都御滞在中や皇国各地での御滞在時に必ずお忍びで街中を見る事を御所望されているのです」

「？」

「でない、E連邦の様に式典中に居なくなる事をQ姫様自らほめかされています」

「御付きの侍女とかおられないのですか？」

「居るには居るのですが…その方もQ姫様御同様、宮中行事より、外におられるのが好きなお方でして…Q姫様と一緒に街中に出ています。いや、却ってQ姫様が街中に出るのを手引きしているようなフシも見られます。皇帝陛下も『皇国内ではQ姫の好きなようにさせてやって下さい』と匙を投げておられるそうです」

B侯爵は珍しく困り果て暗く沈んだ表情をした。こんなに表情を見たことがないIYは（父上がここまで深刻になるなんて…）と父親のB侯爵を気遣い、

「この依頼お受けします、父上。父上は、宮中から街中までオールラウンドでQ姫様を警護できる者が必要である事を望んでいますね…それが出来るのが私だと」

「ありがとうございます…但し任務中は当家の者として、BYと名乗ってもらう事になる…」

「BY…ですか…」

IYはBYと名乗る事に躊躇いを示した。IYはB侯爵の娘であるが、母親が庶民であるため、成人して家を出され、現在は母方の姓であるIYと名乗っている。

「この通り…お願いする」

とB侯爵は頭を下げた。

「…父上！頭をお上げください…任務を引き受けた以上、私の名はどうでもよろしいのです」

HGはスケジュール等の詳細な打ち合わせのためにIYを残してB侯爵邸を出るにあたり、HGを玄関まで見送りに来たB侯爵は

「この度は、私の申し出を聞き入れて下さり、ありがとうございます。この度は、皇王様の勅命とはいえ、私も“Y”の仕事ぶりと成長を間近に見たいのです…父親の我儘をお許しください」

と言ってH Gに頭を下げたB 侯爵の言葉にH Gは驚き（えつ、勅命！？…あれ？今、侯爵様はI Yをいつもの「あれ」と言わずに「Y」と名前で呼んだぞ！さっきの依頼時の説明はわざとじゃないんだ…侯爵様も、娘のI Yについて認めていると言う事か…）と思った。

●実家

H Gが帰った後、B 伯爵は執事と家政婦を自室に呼んだ。

「お呼びでございますか？ご主人様」

B 侯爵は部屋に居るI Yを指して、

「娘のB Yだ…今日から暫く我が家の娘として公務に就くことになった。寝室を用意しな
さう」

「はい、畏まりました」

I Yはやがて執事と家政婦と共に寝室に案内される。

「Yお嬢様の寝室は昔使われていた寝室をご用意いたしました…まさかこのような日が来るとは…爺は嬉しゅうございます」

と言って執事と家政婦は涙ぐんだ。

「爺、それに婆や…なにも泣くことは…それに私は任務が終われば、また直ぐに出て行きますし、名もI Yに戻ります」

「それでも、Yお嬢様がこの家にお戻りになられるとは感無量でございます」

と言って、涙ぐむ二人と廊下を歩いていると、向こうからI Yの姿を見つけた妹のB Kが走り寄ってきた

「姉上様」

「K、お久ぶりね」

B Kは姉のI Yに抱き着いた。優しく受け止めた姉の顔を見上げて

「姉上…いや…I Yさん？」

高校から帰ったばかりのI Yの妹のB KはまだI Yの事についてB侯爵から説明をまだ聞いていなかったたので、廊下でI Yの姿を見つけて夢中で抱き着いたのはいいが…今この屋敷に居る姉の立場…I Yがまた誰かの警護任務で来ているのか（「巻き込まれ親父の子守唄」参照）…が分からなくて困惑していた。

「Kお嬢様、Yお嬢様はこの度は当家のお嬢様としていらしたのですよ」

と家政婦が言うと、

「ホントなの？姉上様」

とB KはI Yに抱きついたまま顔を見上げて、I Yに訊ねると、I Yは目を細めて、

「そうですよ」

「嬉しいです」

と言って甘えた。

その晩、学生寮に居る長男のB Cを除き、家族そろって食卓を囲むが一波乱あった…B侯爵夫人がこの場にI Yが居るのが気に入らず、

「どうして、この女がここにいますのですか？」

と声を荒げた。普段なら押し黙ってしまうB侯爵であるが、

「勅命ぞ！異論は許さん！」

と一括したので、さすがのB侯爵夫人も父親である皇王（B侯爵夫人は皇王の娘でB侯爵家に降嫁した）の勅命には逆らえず黙ってしまった。それを聞いたI Yは（私の任務は勅命なんだ…だから父上が困っているんだ）と思った。

夕食後、BKがIYに甘えて「姉上様と一緒に風呂に入りたい」とか「姉上様とお話したい」とか「姉上様と一緒に寝たい」と言うので、B侯爵は

「数日後にはYは迎賓館で外国からのお客様を警護する任務に就く、それまで甘えなさい」と言った。

「えー、姉上様すぐにお仕事に行っちゃうのですか？」

「はい」

「つまんなーい」

「K、我儘言わないで…それまで一緒に居ますよ」

●TK食いつく

翌日は、テイルルームでTKがIYにHGについてあれこれ尋ねてきた、

「Yお嬢様、HG社長の趣味とか教えていただけませんか？」

「社長の事については、父上から調べるように言われ、調べたのではないのですか？」

とIYが呆れて素気の無い返事をする、

「…それは、HG社長のご経歴や軍歴とかご家族の事とか、徴兵検査の結果とか、思想検査（国家に対する忠誠心とか危険思想が無い事）の結果とかは調べましたけど…趣味とか食べ物嗜好とかは調べていませんわ」

とTKはモジモジしながら言った。IYはそれに驚いて

「えー（めんどくさ!）」

と嫌そうに答えると、TKは

「よろしいじゃありませんか…今度白山亭にお邪魔する時にお土産でも差し上げようと思
いまして」

とIYに縋る様に言った。

I Yは考え込んでしまった(アレ?親父って…もしかして、年増キラー? I F隊長、Y M支部長、T Tさん…H Y姉さんも入るかな?)(笑)ここで、親父の心象を悪くすればこの人近寄らないかも…私もまだ苦手意識あるし…) と思いつき、T Kに対して、

「まず、社長の事を普段私達娘は『准尉』とか『親父』と呼んでいます」

「あら…『親父』と言うのは、なんとなく分かりますが、H G社長の軍時代の最終階級は『上級曹長』ですわ…なぜ?」

「親父の民兵会社時代は社外で軍関係者と任務をする時に向こう(軍)の待遇が准尉待遇でしたので、そう呼んでいます」

「そうですね…そうですね(H G社長ですもの…尉官待遇よね)」
とT Kは納得した。

「親父は、基本なんでも食べますね…ただ、極端に辛いモノとか甘いもとか、匂いがきついモノのは好まないですね…あつ、牡丹餅とかは絶対手を付けませんね」

「なぜですか?」

「…それは、私も聞いた事無いのですが、牡丹餅を勧めると嫌われます(しまった!これ言わない方がよかった!)」

「そうなんです…ありがとうございます(メモしましよ!)。他には?」

「親父はタバコを吸いますよ、お酒も好きですし…」

「あら?私の前ではお煙草は吸いませんでしたか?」

「親父のタバコはパイプ煙草やシガー(葉巻)なので…親父曰く『俺の喫煙は嗜好だからお茶やコーヒーを飲むのと同じだ』と言っています」

「あらー、では私の前では気を使って下さるのですね」

とT Kが嬉しそうに言うと、I Yは首を横に振って

「いえ、目の前で親父がタバコを吸うと言う事はそれだけ気を許している言う証拠だと思

います（あんたに気を使っている…？そ〜じゃないですよ）」

「…そうですか…」

TKはシュンとして答えた。

「過去にIF隊長とお酒を飲んでいてうっかり喫煙してしまい、逆に嫌われたと言う事があったそうです（IF隊長は喉の疾患があったので、元々煙草の煙はダメなんですけどね）」

「IF隊長って、HG社長の民兵会社時代の分隊長さんですよね…女性の方だと記憶していますが」

「はい、親父の彼女です（…もう別れましたけどねー、それに本人達否定してますけど…）」
と言って、IYは心の中で舌を出した。それを聞いて

「えー、HG社長に彼女さん居るのですか？」

とTKは驚き、続けて

「そーですよねー、HG社長ほどの素敵なお方なら…彼女さん居ますよね…」

と言って、TKは落ち込んだ。IYはTKの反応を観て（まるで乙女みたいな反応する人だな…これは意外！）と思った。

TKはハタと何か気づいたのか、気を取り直して

「いや、彼女さんが居たとしても、まだご結婚されてないのですから、私が入り込む余地はありませんわ！」

とTKは言って「フンス！」と鼻息を鳴らした。IYは（この人…親父と結婚する気！？このままでは、ヤバイ！だったら…許せ、親父！）と考え、

「あと、親父は軍オタクであるのと親父の書斎の本棚には、政治・経済、法律、自己啓発、戦術・戦略や銃器・兵器の書籍とそれらを圧倒する漫画の単行本があつて、その中にB5サイズに製本してある成人向け漫画の単行本が数多く（これIYの誇張。作者注）あります（これどくだ！）」

と、I Yは自分の話にT Kがドン引きすると思った（少なくとも、H YとI Yはドン引きして軽蔑した（「巻き込まれ親父の鎮魂」参照）。しかしT Kの反応は

「あら、それは健康な男性である証拠ですわあ」

と両手を合わせて顔の横に持って行き、嬉しそうに言うと、（あれ？）と、I Yは目が点になった。

…恋するオバハンは盲目になっています。作者(笑)

「…それにしても、T Tとか言う女！…いえ…あの方はH G社長の何ですか？奥様ではない事は分かっておりますけど」

T Kは上を向いて忌々し気に言うと、

「T Tさんも、H G社長の教え子ですよ」

I YはT Kに対して呆れたように答えた。その答えにT Kは驚いて、I Yに向き直り、
「えっ…ではYお嬢様と同じくH G社長のお弟子さんなのですか？」

T Kが慌てて尋ねた。

「いえ…確かに親父の教え子と言う事ですが、明らかに私達とは立場が違いますね」

「？」

「T Tさんの立場は特別で、親父の位置づけでは私達のお姉さんのような位置づけです」

I Yの言葉にT Kは眉をひそめ

「お母さんの位置づけではないのですね？『特別な立場』って、ひょっとして奥様候補とか…」

「はい（『お母さん』？なにそれ？）、私達の中で親父とT Tさんとの間柄を知る人は、親父以外はH Y姉さんくらいです。私が民兵会社に入社した時は既に結婚して退職されていたので…」

「えっ？（結婚されていたの？）」

「はい（かつて親父の嫁さん候補…なんて言ったら、T Tさん、この人に殺されそうだし…黙っているか（「巻き込まれ親父の膠着」参照）」

「そうでしたの！（やったー、嬉し〜）」

嬉しそうに言ったT Kに、I Yは慌てて

「でも、F県領地の事件では親父はT Tさんを常に側に置いていましたね（マズイ！なんとか混乱させないと…）」

「エッ？（何？その羨ましい立ち位置…）」

「私も良く分からないのですが、事件当時、親父はT Tさんを頼りにしていたとか…なんて言うか…ただ今でもT Tさんを頼りにしている事は確かですね、参謀的な位置の様な…過去に何があったのかは知りませんが…（「巻き込まれ親父の撤退」参照）」

「…そうなんですか？（エ〜！H G社長自ら頼りにする存在って何？）」

I Yの話に混乱するT K

「はい…それくらいしか私にはわかりません（知らんけど…いや、知ってるけど教えてあげない!）」

I Yが素っ気なく言うと、（あの女…H G社長が頼りにする程の…只者じゃないのね…）
と思っ、T Kは落ち込んだ。

…I Yが図らずも、T Kが勝手に勘違いしています（笑）作者

そこに、

「姉上様、盤ゲームの相手をしてください」

とB Kが来てI Yの腕を引っ張る。

「はい…ではこちらで…（やっ、逃げられる）」

「Yお嬢様、ありがとうございます（チッ残念!）」

●Q 姫来皇

帝都国際空港…

この日来皇するQ 姫の警護任務に就くため、B Y… I Yは帝都国際空港で、皇太子殿下やC 国大使と皇国政府総理大臣が歓談する貴賓室の隅に居た。そこに人気歌手I Mが入って来た。I Mは皇太子殿下やC 国大使と皇国政府総理大臣にマネージャーU Kと共に挨拶を済ませると、I Yの所に来て

「ヤッホーI Y」

「あらI M久しぶり…今は実家に戻って”B Y”と名乗っているの」

「…そうなの？実家に帰ったんだ。で、今日は？」

「残念ながらあなたの警護任務じゃないのよ…」

と残念そうにI Yが言うと、I Mは

「誰の？」

「これから来られるQ 姫様」

「あら、凄い人の警護を仰せつかったのね…」

呆れた様に言うI Mに対して、I Yは

「？（I Mの反応は、偉い人に対する驚きではなくて、エライ大変な人に対する呆れた反応よね）」

と訝しがる

「お姫様は、アーティスト仲間の間でも有名よ…”抜け出し上手の姫様”って」

「…そんなに？」

「あとS B（D 国の人気アーティスト）「巻き込まれ親父の困惑」参照から聞いた事あるけど、Q 姫様は早く皇族の籍を抜けて世界各地を自由に回りたいって…SNSで見た事あるけど、Q 姫様は歌が上手でシンガーソングライターとして十分やっていけるわ」

と言う、I Mの話を、I Yはふと

「あつ、そういえば…I Aから聞いた事あるかも…」

と口に握った手を当てて、思い出した様に言うと、

「あんた…相変わらずネットもリア充もしていないわねえ…」

と呆れられた。

「面目ない…」

と言つて、I Yは申し訳なさそうに頭を掻いた。

「間もなく、Q様様が御搭乗されておりますチャーター機が御到着されます。御到着位置までご案内いたします」

と空港職員から声を掛けられた。

白山亭母屋…

「准尉！C国のQ様来皇の中継始まっていますよ」

テレビの前に居るH Yの言葉に、H Gもテレビ前に移動する。

『隣国C国から、皇帝陛下の御孫様でいらっしゃいますQ様様が帝都国際空港に降り立ちました…皇太子殿下、在皇C国大使と皇国政府総理大臣の歓迎の元、皇国を代表する人気歌手I Mさんによる花束贈呈が行われます。』

それを見て、

「准尉…I Yが…」

「どこだ？」

「I Mさんの後ろに…」

I MのマネージャーU Kと共に、花束を持っているI Yの姿を確認した。

「あのなー、お前が今回警護するのは、そっちじゃないだろうが!」「そーよ」

H GとH Yがテレビ画面に突っ込みを入れる。

タラップを降りたQ姫は皇太子殿下と握手をしてからC国大使と皇国政府総理大臣に挨拶を交わす。続いて、I MがI Yから受け取った花束をQ姫に渡し、互いに握手をした。I Mはその場を去るが、I YはそのままQ姫の傍らに残った。

●事件発生

H Gが母屋の縁側でパイプを吸っていると、R Rが訪ねて来た。

「やあH G!」

「よ、R R!いらっしやい」

お互い手を上げて挨拶する。R Rは縁側に座ると、H Gはお茶を勧める。

「ありがとう…ところで聞きたい事があるんだが…」

「なんだ？」

「来皇された、皇帝陛下の御尊孫のQ姫様に、今皇国側で付けている“B Y”と言う警護官についてなんだけど…テレビで見るとお前の娘達（碓屋のエージェントの事）の一人“I Y”に似ているのだが…」

「なんだ、その事か？そーだよ、I Yだよ」

「えっ、やっぱり？」

R RがH Gの返答に驚く。

「I Yの父親はB侯爵と言う人でね…あの娘はB侯爵の庶子なのでI Yを名乗っているが、任務上元の姓に戻している」

「知らなかった…」

R Rは普段は糸目の癖に珍しく目を見開いているので、

「へえ、お前でも知らないことがあった事があったのに俺が驚いた」

「アハハ！…って、それどころじゃない！あの警護官がI Yなら尚更丁度いい。実はC国反政府組織がQ姫様について不穏な動きがあるのを掴んだ」

「なんだと？またかよ！」

「何だ『またかよ』って…あ、そうかお前、以前もC国反政府組織がらみで大変な目に遭ってるんだっけ…」

げんなりした表情のH Gを見て言った。

「…今度は、誘拐か？暗殺か？」

H Gが呆れた口調で言うと、

「皇帝陛下御一家は、今の（C国）政権下では象徴に過ぎない…しかし、次の政権議会選挙でQ姫様の御父上のQ公爵が与党C国民衆党から立候補する」

「一挙に大統領に立候補する訳ではないんだな…」

「それは…さすがに」

R Rは笑うと、H Gの足元にあるパイプタバコの缶を空けて、自身のポケットから取り出したパイプに詰め始める。

「…それを阻止するためのQ姫様誘拐…そんな事して、意味があるのかあ？C国の国民に反政府組織の心象落す事くらい皇国人の俺でも解るぞ」

「そ、なんだよなあ…H Gでも解る話なのに…」

「R R！お前な」

「とにかく、この事は俺の方で続けて調べて連絡する。ただこういう動きはすぐにI Yの耳に入れておいた方がいいぞ…もし姫様に尋ねられたら『臣下のR Rから聞いた話です』と言えば姫様は納得…するかなあ…あの姫様の性格からすると…」

「オイオイ、随分確信がないね」

「いや、あの姫様はすぐにでも皇族の籍を抜けて外に出たいと考えているんで…」

「籍抜けて一人で食べていけるんだ」

とH Gが感心して言うと、

「あれ？H G、お前知らんのか？Q姫様はネットではシンガーソングライターとして有名だぞ、フォロワーも世界中に居る」

と言つて、R Rはスマートフォンを取り出すとH GにQ姫の歌っている投稿を見せた。

「あゝこの曲と動画知ってる！…えっ、この歌手がQ姫様？」

「そーだよ」

R Rが帰った後、H GはR Rの話をI Yに話そうと思ったが、スマートフォンで電話するとI S（皇国国家公安局）辺りが嗅ぎつける様な気がしたので、メモを書き、王城での式典に出席するため帝都に来ているO県領地知事O T殿下の警護任務に就いているA Mと連携させることを思いつき、H Yを使いに出すことにした。

白山亭の店内に入り、

「H Yは？」

「あそこで充電中です」

と、T Tがクスクス笑いながら指さす方を見ると、店内の隅の方に隠れて壁の方に向かって座っているH Yの姿があった。一見、壁に向かって何かをしている様に見えるが、実は壁に頭をつけて寝ているのである。

「…電池が切れたか…」

H Gが呆れて言うと、H Yの所に2人の女給が近付いてきて、寝ているH Yの髪の毛をイジリ出す…

「今日はどんな髪型にするのかな？」

とH Gは2人の女給のお茶目を咎めようとしなかった。

暫くして

「ダレ〜！私の髪ツインテールにしたの〜」

と店内のレストルームで騒ぐ声が聞こえた。

レストルームから出てきてむくれているH YをH Gが呼び止めた

「准尉！何ですか？」

「重大な使いだ、お前に行って貰いたい。このメモを帝都の皇王省の邸宅でO T殿下の警護任務に就いているA Mに渡せ。それから、こっちのメモをI Yに渡すようにA Mに伝えるんだ」

「はい！」

と言って、母屋に向かおうとするH Yに

「その髪型可愛いから、そのままで行け」

とH Gが言うと、H Yはむくれた。

● B Y

Q 姫が迎賓館に到着すると、先に到着しているI Yが出迎えた。I Yは帝都国際空港から傍に居たが、Q 姫がC 国皇帝からの使者の任を全うするまでは逃げ出さないと考えたので、先に迎賓館に移動して待っていた。

「本日より、Q 姫様の警護を仰せつかりましたB Yと申します」

「あっ、そ」

Q 姫は素気の無い返事を返す。Q 姫の後ろに控えている女性は

「私はQ姫様の侍女RHと申します」

「BYですよろしく願います」

迎賓館のフットマンがQ姫の荷物を持ち部屋に案内する。IYはその一行に従ってついて行く。

Q姫が貴賓室に通されると、フットマンは「警護のB侯爵御令嬢様はこちらの部屋をお使ください」と言つて貴賓室に隣接している部屋（貴賓室の予備部屋）に案内された。IYは貴賓室の使用人部屋に通されると思っていたが、IYはB侯爵家の者として扱われた。そのため、IYの部屋にもメイドが付いた。自分と対して変わらない年齢の女性達を見て、実家のB侯爵邸で働くメイド達の事を思い出し（人それぞれと言うけど…私は幸せなんだろうな…白山亭に帰れば、親父と姉達と自由に暮らせるから）と思った。

部屋でくつろいでいると、IYの荷物が運ばれてきた。それと共に、「OT殿下の使いと言う方からメッセージをお預かりしました」と言つて、IYはメモを受け取ると、（OT殿下の使い？…ああAM先輩の事ね。OT殿下は皇王様の弟君だから今日の式典に出られるのね）と思つてメモを見た。

「准尉から？…えっ？」

HGのメモにはRRから聞いたことが書かれていた。最後に『AMと連携して反政府組織の動向が解るまでQ姫を皇王省敷地内から出さない様に』と書いてあった。それを見たIYは、迎賓館の玄関でのQ姫の素っ気ない態度を思い出し、

「そゝは、言いますが…Q姫様の私に対する心象は凄く悪いのに…どうしましょ」

IYはソファーに寝転んだ。

● 万能警護

Q姫は宮中での式典が終わるとすぐに皇国の街中に繰り出す気だった。侍女のRHとそ

の旨を打ち合わせ、迎賓館の門から王城宮殿に向かう車に乗り込む。その時に警護のI Yの姿が居ないのに気づくが、(どうせ、宮殿には警護の者は入れないから...) と思った。

王城内の宮殿の車寄せに着くとマスコミのフラッシュの雨に晒された。Q 姫は(だから:こんな嫌なのに) と思いながらも作り笑顔で手を振って応じていた。

Q 姫が宮殿内に入ると、別の車から降り、礼装に身を包んだI Yも続く、それを見たQ 姫はI Yに向かって

「ここからは、王族と貴族以外は入れぬはず。地下人の警護はここで帰っていただく、慮外者めが!」

と怒りの表情で言うが、I Yは澄ましていた。

「Q 姫様、こちらの方はB 侯爵家御令嬢でございます」

「えっ貴族ですの?」

と、衛士に言われて驚いた。

先に宮殿内に入っていた、B 侯爵がQ 姫に歩み寄り、

「Q 姫様にはご機嫌麗しく:私は侯爵のB Aと申します。ここに居るのは我が娘Yでございます。娘は皇王様からの勅命で姫様の警護を申し仕りました」

と、取り成す様に言うB 侯爵に、I Yは(だから父上は私にB 姓を名乗らせたのか) と思った。

そのB 侯爵の言葉に素っ気なく、

「あっそ」

とQ 姫は答えると、宮殿内の式典場に入ってしまった。

その後宮殿内での式典ではQ 姫の後ろにI Yが寄り添うように付いていた。

折角皇王主催の晩餐会で体調を崩したフリをして早々に宮殿を辞退して、抜けだそうと計画していたが、I Yが側に居るので計画が実施できない。

一方、I Yの左耳に付けている補聴器には、同じ晩餐会に出席しているO T殿下の警護任務で外に待機しているA MからQ姫付き侍女R Hを捕捉しているとの報告が入っていた…

宮殿外…

A Mは宮殿の車寄せ付近に佇んでいるR Hに近づくと、

「今晚は、間違いではなければ、C国皇帝陛下の御皇孫Q姫様の侍女の方とお見受けいたします」

と声を掛けた。それを聞いて驚くR Hに

「初めてお目に掛かります。私はO T殿下の警護を承っているA Mと申します」

「あら、私を御存じで？」

「はい、こちらでは普段お見掛けしない方であるのと、また同僚のB Yからあなた様の事を聞き及んでおります」

「B Yさん？同僚の？」

「はい、B Yは弊社“碓屋”のエージェントの一人です」

「まあ、B Yさんは、B侯爵家の御息女では？」

R Hは、宮殿入り口でのやり取りから、I Yの立場をそう認識したが、A Mの話に驚いた。

「はい、現在は実家のB侯爵家に戻っておりますが、普段は手前共とエージェントとして任務をこなしております」

「そうですか…（碓屋って…あの）」

「そのB Yからの伝言です『Q姫様は、私が迎賓館に送り届けますので、先にお戻りください』との事です（H Gの指示です。作者注）」

「あら、姫様の計画についてはお見通しと言う事ですのね」

とR HはA Mを睨むように言うと、A Mは毅然として

「はい」

「…分かりました、今宵は諦めると致しましょう」

「ありがとうございます。あと、BYにつきましては、本人が明かすまでは、ここだけの話と言う事で」

「…よろしくてよ」

「ありがとうございます」

AMはRHが公用車で宮殿を後にするのを見送り、スマートフォンを取り出すと、IYのイヤホンに繋げて、

「IY」

『はい』

「AMだ。Q姫様付侍女のRHさんは、素直に迎賓館に引き上げた」

『はい、ありがとうございます。AM先輩』

宮殿での晩餐会が終わり、宮殿を辞するQ姫に対して

「姫様…お連れの方は先に迎賓館に帰りましたよ」

とBYが耳打ちした。それを聞いたQ姫はIYを睨みつけ

「何かもお見通しって訳ね！」

Q姫の怒りの表情に、IYは困ってしまい、Q姫との信頼を得るためにはどうしたら良いか考えた。

「姫様ご安心ください…姫様のご希望通り、お忍びで街中を見る時もお供いたします」

IYが取り成すように言っても、

「結構です！」

と言って、意固地になる。IYは皇帝一族の籍から早く抜けたと考えているQ姫に、だっ

たら、自分の身分を正直に話した方が良いと考え、

「…そうおっしゃらずに…今は勅命でB侯爵令嬢の身分に戻って居ますが、元の私は庶子でB伯爵家をとうに出された身です。普段は母方の姓で、街中で暮らしております」

と言うと、Q姫は驚いて

「ホントですか？」

「はい（食いついた…）」

「もっと詳しく話を聞かせてくれる？」

「はい…その前に迎賓館に帰りましょう」

「分かったわ」

●IYピンチ

迎賓館に戻り、着替えることもなく、そのままQ姫の部屋に通された。

「この通り、宮殿から逃げ出さず、約束通り戻ってきたわよ。そちらも約束通り、あなたの身の上を話して頂戴」

とQ姫はソファーに掛けて言った。

IYはQ姫の指したソファーの向かいの席に座る。侍女のRHが二人に黙ってお茶を出す。

「では、私の身分の話をしましょう…私は先程言いました通り、B侯爵家現当主BAの長子ですが母は庶民でしたので、庶子になります。私の事を身籠った母は、屋敷を出て私を産み街中で母と二人で暮らしておりましたが、母が病死したので、幼い私は父に引き取られ以後成人するまでB侯爵家におりました。父には皇王陛下の姫で降嫁された義母との間に跡継ぎの男子が既におりましたので、成人後、家を出され、母の姓である“I”を名乗り独りで生きることになり、民兵会社に入社しました。そこで出会った教官が定年退職し、喫茶店と

エージェント会社を興したので、会社を辞めてもつと教えを乞おうと教官に弟子入りしました（すみません：最後の方は順番を逆にしていますが、I Yの方便です。作者注）

I Yの話をワクワクしながら聞いていたQ 姫だったが、途中から複雑な表情になった。それに気づき、

「どうかされましたか？」

と訊ねると

「あなた：複雑な出自と人生歩んでいるのね：私てつきりあなたが侯爵家令嬢の深窓お嬢様だと思っていたけど、街中で暮らしていて、しかもエージェント会社の社員と言う事なら私の警護に任命されるのも理解できるわ」

「…」

「私の来皇した目的の一つも、もうご存じですわね？」

「はい：皇国の街中の暮らしにご興味がおありだと聞いております」

「そうよ：私は早く皇帝一族の肩書や籍を捨てて、広い世界を自由に旅して回りたいの！歌と音楽を片手にね：だから今日、宮殿でのおじい様（C 国皇帝）のお使いが終わったら、とつと抜け出してR Hと帝都内のどこかに行こうかと思っていたけど：それ以上の収穫があったわ」

「？」

「街中で見聞きするより、よっぽど今あなたと話をする事の方が私には興味があるわ：改めてよろしくB Y」

と言って、Q 姫は身を乗り出してテーブル越しにI Yに握手を求め来た。複雑な表情でQ 姫と握手するI Y、

「…はいこちらこそ…（Q 姫様との信頼を築く事は出来たけど：なんか私、Q 姫様の研究のサンプルにされたような…）」

と思つて、複雑な表情になった。Q姫は、ソファ―に座り直すと、
「早速だけど、あなたの街中での普段の話を聞かせてくれる？まずは、普段どんな買い物してるの？」

途端に砕けた口調でQ姫が話しかけてきた。その質問に驚き、続いて思案顔になるIY、それを見て、

「どうかしましたか？BY」

とQ姫が尋ねると、IYは答えに詰まってしまった。（…どうしよう…）と…、以前妹のKに同じ事を聞かれたところがあるが、普段、街中のおしゃれなショッピングには相変わらず、IMについて行くだけである。IYは黙って俯き、（こう言う事には、IMに相談すると一番いいけど、今は夜だし忙しいだろうし…とは言え、HY姉さんだと、趣味趣向が違いすぎるし…）と考えをめぐらす。そして、ハタと思いつき、

「…すみません。中座してよろしいですか？」

と言った。それを聞いたQ姫は驚き、

「はい…どうぞ」

と言った。

IYは慌ててトイレに入るとスマートフォンを取り出し

「もしもしIA？」

『何？』

「今、大丈夫？」

『一応…』

「ちょっと教えてよ」

『何を？』

「あなた、普段のショッピングとかどこ行ってるの？」

『ナニ？その質問？』

「…実は、お姫様に普段のショッピングについて聞かれて…」

『え〜！』

I Aの通話の後ろでH Gの声が聞こえる。

『あゝ、ちょっと親父の介入！後でかけ直すね』

と言つて、通話を切られた。

白山亭内…

「I A…店が暇だからと言って、スマートフォンで通話するのはどうかと思うが…」

と、店内と厨房の間でI Yからの電話を受けたI Aに対して、バーカウンターに居るH Gが注意する。

「すつ、すみません！」

と謝るI Aに、H Gは

「ちなみに、誰からの電話だ？緊急要件みたいだったが？」

と、電話の要件を訊ねた。

「…実は…I Yから変な質問がありまして…お姫様から普段のショッピングについて聞かれたそうで、それでわたしが普段のショッピングとかどこ行ってるか聞かれて…」

とI Aが答えると、H GはI YがQ 姫からショッピングについての質問を受けて、答えに窮している事を感じ取り、

「そうか…」

「はい」

「ヨシ！I Yを助けてやれ…あれはリア充ではないからな」

と言うと、I Aは

「えゝ」

と、不満そうに答えた。

貴賓のトイレ内：I Yは（あゝ、どうしよう！あまりここに籠ってられないし…）と焦っていた所で、I Yのスマートフォンの着信音が鳴った。相手はI A：

『あつ、I Y：親父から許可が出たから、話を続けるわね』

「ごめんねー」

『あくまでわたしの場合だけど、わたしはY国際港街ショッピングモールによく行くわよ』
「なに買ってんの？」

『そんなのタダのウィンドショッピングに決まってるじゃん！そんなに給金貰ってないし！』

「…ありがと（駄目だこりゃ！）」

と言って、I Yは項垂れて通話を切った。

白山亭内：

I Yから通話を切られたI Aはむくれて

「何だったのよ！一方的に通話切って…それにしても、親父はI Yの事になると甘くなるなあ…」

と言いながら店内を歩いていると、H Yが近付いてきて

「それは違うわよ」

「…H Y姉さん」

「別にI Yに限らず、いつも外でエージェント任務に就いている人に対しては、こちらはで

きるだけバックアップする様にしているじゃない…だから協力してあげてね」

と諭すように言うHYに、IAは仕方なく、

「はあい」

と返事をした。

●IAとIYの思い出

「IYとは入社式で会いました。スラッとして色白な娘…隣に居ても、お人形さんみたいな…いえ、あたし達が遊ぶお人形さんじゃなくて、飾ってあるお人形…でも、なんか暗い人って感じがしました」

それが、IAがIYに抱いた第一印象。

「入社後の新兵教育・訓練プログラムの講義を准尉から受けている時にIYの左隣の席に座っていたんだけど、IYはただ真つすぐ正面を向いていて、私が話しかけてもなかなか気づいてくれなかった…正直、入社当初から臨席の同期にシカトされたと思って、憤慨したわね…でも、最近知つただけけど、彼女生まれつき左耳が難聴だったのね…准尉の講義に集中していたのね…ゴメンナサイ」

IYが民兵会社DKを辞めた事について…

「あたしは、F県領地の事件時には本部に居たので、なにがあつたのか、後からIY本人やTY姐さん、HY姉さんに教えて貰いましたが、TY姐さんの「IYは、IF隊長の部隊に通信要員として編入された時には、凄く暗い娘だつて言ってたけど…あれって、耳の難聴のせいでSS隊長の後方支援部隊に配属されて、落ち込んで無気力になったと思うの！で、F県領地の事件直後に突然会社退職して、当時、同期達となにかあつたんだろうか？と噂していたら、ちゃっかり、准尉の所に押しかけ弟子入り？なんかして、なに考えてんの？…と思つたら、Y国際港のフェリー乗っ取り事件で活躍してんじゃん！かつての同期として正直

ジェラシー感じたわよ。そのとき、あたしは、相変わらずのドジで社内でお局様に睨まれて、メンヘラになりかけて、会社辞める時に当時所属していた部隊のIF隊長に相談したら、『なら、HGに話してみようか』となって、IF隊長に連れられて白山亭に行って、弟子入り試験を受けさせられたら、結果は散々：危うく弟子入りができなくなる時点であたしの大型自動車免許証とTY姐さんの口利きで、辛うじて、TY姐さんの弟子扱いで弟子入り出来たわ：なんかへんなの？：で、IYは、准尉の元で着実に実力を発揮したのだけど、それは、准尉があれこれ一々教えるのではなく、必要に迫られて習得した能力と知識だつてことをつい最近知ったわ。それから、准尉がIYに適した任務を与えたから経験が積めたのね。あたしも、准尉に利目が左だと気づかされて、射撃の腕が向上したわ。軍曹（SK）さんにも、ガンスミスの腕を認められるし：同い年のIYはすっかり碇屋のエースとしてHY姉さんとツートップ組んでるし：あたしも頑張らないと！」

●えーい、なる様になれ！

貴賓室内：

意気消沈してトイレから戻ってきたIY：それを見てQ姫は心配そうに

「ずいぶん長かったようですけど」

「スミマセン：普段食べられないものを頂きましたもので…」

と申し訳なさそうに言いながら腹の辺りを擦ってみせた。

「大丈夫ですの？」

「は、はい」

「では、話を聞かせて頂戴」

「…普段の買い物の話ですよね…」

「そうヨ」

「…」

I Yは答えに窮してしまった…どう答えるのが正解なのかも分らなかった。I Yが何も言わないので、Q 姫が怒り出し、

「やはり、あなたは私を謀ったんですね。本当は何も街中の事を知らないのではなくて！」と言ったので、I Yは（えーい、なる様になれ！）と腹を決めて

「…それは違います。私は普段街中では食料品や日用品等の買い物しかしていません。いわゆるショッピングと言うモノになると、友人や会社の同僚の付き合いでした事しかありませんので…」

それを聞いたQ 姫は呆れて

「…それでいいのですけど…」

「はい？」

とI Yが目点を点にして答えた。Q 姫はI Yを憐れむように、

「私はあなたの言う、ショッピングではない買い物について知りたいのよ。普段の皇国の方々が何を購入して何を使っているかを知りたいの。だから無理してオシャレな所とか紹介しなくていいのよ」

と優しく言うど、

「そうでしたか…」

とI Yは安堵して答えた。それを見たQ 姫は

「では質問を変えましょう…まず、普段の日常はどうしているのですか？」

「私はこの様にエージェントの仕事をしていますので…任務も警護任務が多いです（これも、以前、妹に同じ質問されたような…）任務がない場合は、家で本や雑誌を読んだり、テレビやビデオを見たり、警察署の道場で組手や体術の稽古とか、射撃場で訓練したり、同

僚達と港のコンテナ埠頭での訓練や、機動隊の訓練施設で訓練したり…そうでないときは社長が経営している喫茶店でウェイトレスしてたり…とかあ？…後は…（なんだろう？）会社の人達や友達とお買い物したりとか…はさつき言いましたので、あと食べ歩きとかあ…」と段々しどろもどろになりながら、話すIYに

「ネットとかゲームとかしないのですか？」

と呆れて尋ねるQ姫に、IYは申し訳なさに

「はい…私はあまり…今朝も友人にからかわれましたが…そういえば、Q姫様はSNSに歌の投稿をなさっておられるとか…」

と答えると、Q姫は驚いて、

「えっ、見た事無いの？」

「…はい、申し訳ありません。ネットの動画とかSNSには殆ど興味が無いもので…今朝友人から教えて貰いました」

と言いつつIYに、Q姫はふとIYの交友関係に興味を持ち、

「先程からご友人の事が何度も出てきますが？」

「…はい、IMと言つて、歌手をしています」

と、恐縮して言うIYの答えに、意外な人物の名を聞いたQ姫は驚き、

「えっ？あの国際的人気歌手のIMさん？今朝空港で花束くれた」

「はい」

IYの返事を聞いた途端、Q姫は豹変して、

「えー、あなたIMさんのご友人でいらしたの？」

Q姫がテーブルの上に身を乗り出した。

「はい…実はQ姫様から普段のショッピングの話を聞かれ、いつも私はIMのショッピングに付き合われていますので、先程中座しており、電話でIMに聞こうかと思いましたが、

彼女も忙しいでしょうから会社の同僚に電話した次第です。お恥ずかしい話で申し訳ございません」

と、恐縮して頭を下げてI Yが言うと、

「へえゝ意外！…こんな所でI Mさんと身近な人に会えるなんて…世の中狭いモノね」

と言って、Q 姫はソファアに座った。それに対してI Yは

「はあ…」

としか言えなかった。

その後は、他愛のない話が続き、I Yが白山亭での出来事を話すので

「私、B Yの働いていると言う白山亭に行ってみたいですわ」

と言う、Q 姫にI Yは（ええゝ、あつても、白山亭なら私のホームだし、R Sさん（C 国 国 家調査局員）達も居るし…）と考え直し、

「…分かりました。ご案内いたします…但し」

「但し？」

「Q 姫様が、来皇のスケジュールをすべてこなしてからにしてください」

とI Yが言うと、

「…あなた…結構しつかりしているのね」

と言って、Q 姫が呆れた、

「はい…街中に居るとこういう駆け引きが良くありますので…」

とI Yが、ニッコリ笑って言い返した。

「では、もう一つ…I Mさんと会わせて頂ければ、あなたの言う事を聞きますわ」

と、Q 姫が追加条件を出してきたので、I Yは（Q 姫様は、シンガーソングライターとして

I Mにプロの意見を聞きたいのね）と思い、Q 姫の願いを叶えるべく

「わかりました」

と返答した。それをQ姫の座っているソファの後ろに立ち控えてるRHの顔が引きつった。

●事態が動く

翌日から、Q姫が淡々としかもおとなしく来皇日程をこなしていくので、周囲は驚いた。地方の式典に出かけてスケジュールにある街中のお忍び行動もIYを連れて出かけていき、予定通り宿泊施設に帰ってきた。

周囲は、「Q姫様がこんなにおとなしくしているは珍しい…きっとボディガードのB侯爵家令嬢が凄腕なのに違いない」と噂していた。

その事を皇王から「そなたの娘はどの様な手を使つてあのQ姫と信頼関係を築いたのか」と訊ねられ、B侯爵が答えに詰まって恐縮してしまった。

白山亭母屋…

RRが訪ねてきて、HGとRRは縁側で盤ゲームを指しだす

「ところで、その後なにか分かったか？」

「おう、その話をしに来た」

「なんだ？」

「Q姫様はご自身の楽曲をSNSの有料サイトに投稿している。そこで得た課金はすべて国連の難民貧困基金に全額寄付されている。その一日の課金はちよつとした国際的企業の資本金並みだ…そこに、連中（C国反政府組織）が目をつけた。連中の狙いはQ姫様を拉致して自分達が作った芸能事務所と強引に契約させて、Q姫様の楽曲の著作権料と使用料を組織の活動資金にしようとしている」

「セコッ！何考えてやがる…」

「…だろう！Q姫様だってそんな契約結ぶ訳がない。だったら自分達で作詞作曲してS Nの有料サイトに自ら投稿しろ！…と言ってやりたいよ」

「…とすると、我々がやることは？」

「Q姫様のガードと連中がQ姫様に二度と手を出せない様にする事かな…幸い、Q姫様はおとなしくI Yと共に行動している…でもいったいどうして、あのQ姫様の手綱を握ったのかね…」

と不思議そうに訊ねるR Rに、H Gは

「俺にも分からん…I Yの報告では信頼関係を得ました…としか報告がない」

「信頼関係を築けただけでもスゲーな」

「あー、でも『日程の最終日にQ姫様を白山亭にお招きするのと、そこでI Mさんと妹のKを会わせるので、よろしくお願いします』と言っていたな」

「あゝん？」

H GのI Yからのコメントに対して、R Rは眉をひそめた

「多分、I MさんとQ姫様を合わせることを取引材料にしたのでは？Q姫様はシンガーソングライターとして独り立ちしたいのだから？…当然プロのシンガーソングライターとして世界で活躍しているI Mさんの話を聞きたいだろうし」

とH Gが推測して言うと、R Rは納得し、

「なーる」

と言って、R Rは腕組みして考え込んだが、やがてふと、

「なら、白山亭にC国反政府組織の奴らをおびき寄せるか…」

「オイオイ！Q姫様の安全確保は、どーする？」

今度は、H Gが眉をひそめた

「それは、俺とお前で確保する…自信が無いのなら、加勢を頼んでもいいぜ」

「…えらくウチを下手に扱ってくれるねえ…」

「そういうわれない様にしてくれ！」

「わーった。でも人数は？流石に俺とお前でも軍隊は相手にできんだろう…」

…現在、C国「反政府組織」は、C国内で軍閥化しており、独自の軍事組織を持っています。

作者

と、H Gが心配顔で訊ねると

「それはだな…俺が掴んだ情報では、Q姫様の案件に関わっている反政府組織のチーム…正確には奴らの作った芸能事務所の皇国法人だが…その要員は全部で6人だそうだ。連中の事務所とかは俺の方で手当てするよ」

「6人か、それなら、ウチの連中で間に合うな…」

「一応、俺も加勢する」

「万が一の場合はよろしく」

●作戦会議…但し、今回は「めんどくせー」は無い

R Rが帰った後で、H GはH Y達を集めて作戦会議に入る。いつもの「親父モード」で、

H G「C国皇帝の御孫様でいらっしゃるQ姫様が御来皇日程の最終日の明日、ここ白山亭に御来店なされる旨、B Y…もとい、I Yから連絡があった」

T T「凄いですね。当店の名誉になります」

H G「その席には、Q姫様のたつてのご依頼で、人気歌手のI Mさんと、I Yの妹君であるKお嬢様が当店にいらっしゃる」

I A「またKちゃん（B Kは以前白山亭でアルバイトしていました）が来るのですね」

H G「そうだ、しかし…」

「『しかし？』」

H G 「Q 姫様を巡ってC 国反政府組織の不穏な動きがあるとの話を聞いた」

T Y 「…またですか？」

H G 「T Y…その気持ちは俺も同感…またあいつらの相手をすると考えたと気が重い」

H Y 「C 国反政府組織の不穏な動きって何ですか？またQ 姫様との関係は？」

H G 「連中、Q 姫様を拉致して自分達が経営している芸能事務と契約を強引に結ばせる気らしい…」

A M 「なぜですか？」

H G 「現在Q 姫様の有料サイトに投稿している収益はすべて国連の難民貧困基金に寄付されている。その金額はかなり大きい…それを連中の活動資金に回したいと思っているらしい…」

M P 「それは酷いネ」

H G 「なので、我々は連中が明日ここ（白山亭）でQ 姫様を拉致しようとする不届者をおびき寄せ、それを退治する事にする」

H Y 「待ってました」

と言って、H Y が手を叩く。

A M 「でも、人数は？まさか軍隊規模ではないでしょうが…」

H G 「俺が仕入れた情報では、Q 姫様を拉致する不届き者は全部で6 名…多分バラバラで店内に入ってくるはずだ」

T Y 「6 人ですか…なんか少ないですね？それから本当に来るのですか？」

H G 「来る！その理由はQ 姫様の御来皇の最終日のお忍びで護衛が少ないからだ。そして、この人数はあくまでQ 姫様拉致の首謀者の人数である。まずはそれを捉える」

「『はこ』」

TT「でも、私達で捕らえるにしても、Q姫様とIMさんとKお嬢様の安全確保には少々心元ないですが…」

HG「そこは、人の手を借りる」

TT「？」

HG「TT、明日のアルバイトのシフトは誰が入っている？」

TT「はい、港町水上警察署のMSさんとAKさんですね」

HG「そのお二人にはIMさんの保護をお願いしよう」

IA「Kお嬢様は？」

HG「Kお嬢様には、TKさんがついて来るだろうから、そちらにお願いする」

TT「エ」

TKの名を聞いたTTが拒絶反応を示す。

HG「不満か？TT」

TT「いえ…」

と言つて、口ごもった。

HY「で、肝心のQ姫様は？」

HG「Q姫様の警護はIYの任務だ…あと、当日RSとRRが来る予定になっている…それで十分に対応できる…なので、各々方ぬかりなき様…」

「「はい（またかよ！時代劇の見過ぎだ、この親父…）」」

HGはこの事をIYに連絡した。

IYはC国反政府組織の目的を知って驚いた

「…分かりました。当日、妹のKとIMの身の安全ついてお願いします」

と言うと、HGは『任せろ』と返事をした。

●完全ホーム試合

Q 姫の来皇最終日、I Yは変装したQ 姫を連れて電車に乗り、Y 国際港駅に降り立つ。帝都を出る時にI YはQ 姫付き侍女のR Hも誘ったのだが、「Y 国際港の町はとても治安が良いの…」と言って白山亭に行くのを辞退した。

駅構内からして、何か普段と違う雰囲気でした。(なんか見張られている様な…)と駅前のロータリーを歩きながら警戒した。

「姫様、こちらが私が働いている白山亭になります」

「古いですが、威厳のある建物ですね」

Q 姫は白山亭の建物を見上げて言う、

「創業はオーナーの曾祖母に当たるお方で100年の歴史を持っております」

とI Yが説明すると

「凄いですね」

Q 姫が感心した。

「では、入りましょう」

I Yが扉を開けると

「いらつしやいませ…あらI Yお帰りなさい」

とH Yが出迎えた。小柄で童顔のH Yを見たQ 姫は

「あら…可愛らしいウエイトレスさん…こんにちは」

とにこやかに挨拶した。

「はい、ありがとうございます。店内へどうぞ」

とにこやかに応対するH Yを見て、I Yは(H Y姉さん…そこは肯定しないで(笑))と突っ込みを入れた。

I YがQ姫を伴って店内に入ると、目が点になった。

そこには、H GとT Tがバーカウンターに、I Mと妹のB Kは自分が呼んだので居るのは当然として、テーブル席にI Mと同じ芸能事務所のC E、別のテーブル席に同席する妹のB KとB侯爵秘書のT Kと更に国家公安局のI S、窓際のカウンター席にD国大使館付エージェント機関所属のM Z、また別のテーブル席にはC国国家調査局でR Rの娘R SとR R、いつもの窓際のカウンター席に港町水上警察署の捜査官K J、女給姿であるが同じく港町水上警察署のM SとA K…後は、窓際のカウンター席に座っているT Y、女給姿のH YとI AとM P、執事姿のA M…の錚々たるメンバー。それを見たI Yは（アハハ…アハハ！それでC国反政府組織が襲ってきてても、容易に撃退される…こりゃ完全ホーム試合だわ！）と思つて、I Yは引きつった笑いをした。

H YはI YとQ姫をバーカウンターの席に案内する。

「I Yお帰り…そちらの方は？」

とH Gが白々しく聞く。I Yは苦笑して（親父…わざとらしいですよ）と思いつつ

「友人のQさんです（お忍びなので“姫様”と言わない）」

「そうですか…いらっしゃいませ、ウチのI Yと仲良くしていただいてありがとうございます…」
「そうですか…ご注文は？」

とH GがメニューをQ姫に差し出す。

「Yさんは何がお勧めなの？」

「私は、この白山亭オリジナルコーヒーがお勧めです」

「そうですか…では私も同じものを…」

「畏まりました」

H G自らコーヒーを淹れる。

そして、

「お待たせしました。当店創業時に創業者の私の曾祖母の編み出したコーヒー豆の配合比を忠実に100年の間受け継いだコーヒーを是非味わってください」

と、HGはQ姫にコーヒーを出す。Q姫は一口飲むと

「あら…美味しい」

と言って、微笑んだ。

「IY、そろそろ私にも紹介して」

とこれもわざとらしくIMとCEが割って入る。

「こちらは、先日友人になったQさん。こちらはQさんが合いたいとおっしゃっていたIMさんです。それからお隣は同じ事務所の女優でCEさんです」

とIYが紹介すると、

「初めましてIMです。IYから聞いたと思いますが、一応歌手やってます」

「…Qです。そんな有名な歌手の方なのに…ご謙遜を…初めまして」

と言って、Q姫とIMは握手をする。

「CEです。アクション俳優をしています」

「Qです。IMさんと同じ事務所の方ですか…よろしく」

とQ姫は、CEと握手をした。

「姉上様、私も」

とBKがIYの袖を引っ張る。

「ハイハイ…こちらは私の妹のKです」

IYはBKを抱き寄せてQ姫に紹介した。

「BKです、始めまして。姉上様と仲良くしていただき、ありがとうございます」

「こっ、これ…K…また」

I YがB Kの言葉に赤くなった。それを見てQ 姫は微笑みながら、

「あら…可愛い妹さんね…Q よ。よろしくね」

と言ってB Kにも握手を求めた。

「ハイ」

と言って、Q 姫の握手に応じた。

暫くI MとC E、それにB Kを交えて話が続く、Q 姫が、自分がS N Sに投稿した動画についてプロのI Mの意見を聞くこうとして、本人である素性を隠して質問する光景が見られた。

やがて、6人の客が来店した。各自別々の体を取り、それぞれ空いている席に散らばる… H GはI YがQ 姫を連れて来店する前に、事前に打ち合わせた各自の行動に従って、T Kに目配せすると、T Kは小さく頷き「Kお嬢様、Yお嬢様とご友人の方々のご歓談をあまり邪魔しませんように…」と言って、B KをI YとQ 姫から離して店の外に連れて行く。続いてI Aが「折角淹れたコーヒーが覚めてしまいますわ」とI Mに耳打ちしてI MとC Eがバーカウンターから離れてテーブル席に着く。そのテーブルの前にM SとA Kが立つ。バーカウンター席にI YとQ 姫だけになったのを見計らって、来店した客の中の一人がQ 姫の側に寄ってきて、いきなりQ 姫ではなくI Yに拳銃を突き付け、

「おとなしくしてもらおうか…」

と言った。途端に6人の客…いや暴漢が拳銃を構える。

「Q 姫様…この女の命が惜しいならば、我々に付いて来ていただきたい」

と言って、I Yのクビに手を掛けた…その瞬間！

「成敗！！」

とH Gの掛け声で、暴漢が取り押さえられる。

I Yのクビに手を掛けた暴漢は、I Yの掌底に拳銃を飛ばされ、続いてI Y得意の踵落としを見舞われた。他の暴漢も、H Yに投げ飛ばされるは、T Yの警棒に叩き伏せられるは、M Pに頭を掴まれて床に組み伏せられるは、I Aにお盆で殴られ、M Pに組み伏せられるは、A Mのカウンターパンチにノックダウンされるは…と散々。

それを見ていた、M Z、R Sは（私達の出番はないのね）と思った。

一方Q 姫は

「…あなた達…」

と言って驚いた。

「はい、今、暴漢を組み伏せたのは、我が社のエージェント達です」

とH Gが言った。それを聞いてI S、M Z、R R、R Sは（この場に居る他の組織勢力の存在をわざと隠したんだ…）と感じた。

H Gは、いつもの席に居るK Jに目配せをして、

「K J君…港町署に連絡してくれないか」

「はい、H G社長。お安い御用ですよ」

と言って、K J（彼は港町水上警察署の捜査官です）は港町署に連絡してパトカーを要請する。

「なんか…手際が良すぎるのではなくて？」

Q 姫がI Yに言う

「いえ…彼は私のファンなので、いつもこの店に来ています」

I Yが白々しく言う、Q 姫は

「そーなの？」

と言って、K Jを見た。

「はい…彼女の為ならお役に立ちます」

とK Jがシレつと言うと、I Yは（気色悪！）と思って舌を出した。

H GはQ 姫に対して

「どうも…お恥ずかしい所をお見せしてしまい、どうもすみません」

「私、いいまで何度か危険な目に遭いましたが、こんなに手際のよい処置を初めて見ました」

「そうなのですか？ Q 姫様」

H Gがわざとらしく言うと、Q 姫は観念して

「やっぱり、私がC 国の皇帝の孫と言う事がバレていましたね…B Y…いや、ここではI Y
と言うべきかしら…」

Q 姫はI Yが自分の事をH Gにバラしたと勘ぐった。

「いえいえ、Q 姫様の御来皇中の警護は皇王陛下の命により、我が社として請け負ったので、
当然ここに居るB Y…いや、I Y他、我が社の社員は知っております。そして皇国でQ 姫様
を狙っている、不逞な輩が居ることを察知し、この場で取り押さえることにしました。Q 姫
様にホンの一時でも危険な目に合わせてしまったことをお詫び申し上げます」

と、深々と頭を下げるH Gに、

「そうなの？」

と言って、I Yを見るQ 姫に

「…はい…実は私が任務に選ばれたのは皇王陛下の命によるものです…ですが、私は民間
のエージェント会社の社員ですので、父上を通じ、私個人ではなく会社に対して警護依頼が
ありました。隠していて申し訳ありません」

「あなたの複雑な人生とお仕事が皇王陛下に評価されたと言う事ね」

「Q 姫様…そんな…実は…Q 姫様がS N Sにアップしている歌や曲の収益金をC 国反政府

組織が活動資金にしようとする企みがありました…」

とI Yが恐縮して言うのと、

「…その事ですか…以前から、私に私の歌や曲の使用権の譲渡を迫ったり、私と個人的に契約したいと言う芸能事務所がある事は知っていました。私は突っぱねていました…しかもよりによって、お爺様を玉座から降ろしたC国反政府組織が後ろ盾だったなんて…皇族の一員として恥ずかしいです」

Q 姫は項垂れてため息をつくと、

「BY…あなた達は、私を救っただけではなくて、全世界の難民や貧困の方々も救ったのですよ…私から感謝します…宿舎（迎賓館）に戻ったら、私から皇王陛下に感謝の辞を申し上げます」

「…そんな、勿体ないお言葉」

RRは独り眉を潜めてしかめっ面をしていたが、バーカウンターの横の従業員出入り口から出て行った。その際にHGはRRに対して、（すまん！）と片目を瞑るとRRはHGにVサインを出した。RRのVサインが事件解決を示していると認識した。

●それぞれの帰路

白山亭母屋…

「准尉！Q姫様の帰国記者会見の中継が、始まりますよ」

テレビの前に居るHYの言葉に、HGもテレビ前に移動する。

『先週、御来皇されました隣国C国からの皇帝陛下の御孫様でいらっしやいますQ姫様が本日御帰国されます。御帰国に際し、Q姫様の記者会見が行われますので、帝都国際空港内の記者会見場から中継を放送します』

帝都国際空港内記者会見場：

「Q 姫様、御帰国に際しまして、皇国での御感想をお願いします」

「はい…この度は私の訪皇に関しまして、皇国の皆様の熱烈なご歓迎に対しまして、熱くお礼を申しあげます。訪皇中は、皇王陛下に祖父C国皇帝に成り代わりまして、変わりなき友好に対する感謝と更なる友好関係を続けることを御奏上申し上げました。訪皇の日程は私にとりまして、楽しくまた充実して日々でした。また、訪皇中に訪れたと土地での暖かい歓迎を受けました事に感謝いたします。皇国の人々の生活や話に触れることができた事に感謝致します。皇国とC国との友好関係が引き続き末永く続くことを祖父皇帝に成り代わり希望致します」

Q 姫の記者会見は続いているが、Q 姫付侍女RHは居並ぶ記者達の後ろに立つ一人の人物を見つけ、「…スミマセン、ちょっと外します」と言って、隠れるように記者達の後ろに居る人物に駆け寄る。RHが駆け寄るのを見た人物も隠れるように記者会見場の外に出た。

「RH…」

「おとーさん、来てたのね」

RHがそう呼んだ人物はRRその人であった。

「見送りに来た」

「姫様の御供で白山亭に行けなくてごめんなさい…白山亭に行ったら、おとーさんやおかーさんや妹のSに会いそうだし、会ったら、私里心がつきそうで…」

「そうか…来なくて正解だったよ」

「姫様から聞いたの、白山亭内で大捕物があつたそうじゃない」

「うむ…Q 姫様の御宸襟を脅かす不屈き物を捕まえた…と言っても、俺とSはただ見ていただけが…」

「あら…（Sも居たのね）」

「結局、不届き者は親友のHGのエージェント派遣会社碓屋の社員達によって捕らえられ、警察に連れてかれた」

RRの言葉にRHは、宮殿で“碓屋の社員AM”と名乗った、男の事を思い出した。

「そう、そんな事に…実は、おとーさんに来皇したら、話そうと思ったことがあって」

「なんだ？」

「妹のSを国家調査局に入れたのは私なの…」

「なに？」

「おとーさんが皇帝陛下の臣下であり続けるように、（C国）政府にもR家の者が居る必要があると考えて…かつてのおかーさんの様に…」

「L（RRの妻）の様にか！」

…RRの妻LはC国政府の現与党の（野党時代の）元秘書官兼ボディガードです。作者

「ええ…おかーさんも、Sを国家調査局に入れるのに賛成してくれたわ」

「…そうだったのか…帰ったらLに聞いたさそう…」

「おかーさんを責めないでね！（笑）おとーさん」

「わかってるよ（笑）お前、段々おかーさんに似てきたかになってきたな！」

「それは、おとーさんとおとーさんの娘ですから（笑）」

「苦労かけるな…」

「それも、おとーさんとおとーさんの娘ですから…」

と言うRHの声のトーンが下がった。

「うむ、元気だな！何かあったら、連絡をくれ」

「はい、でもいつまでも子ども扱いしないで」

「はは（笑）、俺もおかーさんも心配しているのだよ」

「はい、おとーさん、また…おかーさんよろしく」

「おう、またな」

R HがQ姫の元に戻るとI Yが微笑んでいた

「I Yさん見てたの？」

「はい、R Rさんと何か話していたようですが…なんか嬉しそうでした。まるで久々に会った父娘の様…」

と言うI Yに、R Hは（I Yさんも、正体を明かしているし、私こころで…）と考え、吹っ切れた様に、

「あちゃー、バレましたか」

「？」

「…実は私、R Rの娘です」

とR HはI Yにニツコリと笑って、自分の正体を明かした。

「え？」

「Q姫様が皇族の籍を離れるまで傍にいる様、父から命じられていました…」

「そうだったんですか…だから、Q姫様が訪問先で抜け出しても、ご無事だったのですね。

それから、Y国際港に来るのを遠慮したのも…」

「はい、でも私は姫様が皇族の籍を離れても、一緒に居ようと思っています」

「そうなのですね」

「Q姫様は貴女を見て、この先の御自分の生き方をお決めになられた様です」

「え？」

「はい…私も貴女の生き方を見習おうと思います」

「…お恥ずかしい…」

「ご謙遜なさらずに…父と妹によろしく…あつ、でも私の事はH G社長達には内緒ですよ…もつとも、H G社長は多分気づいたと思いますけど…」

「はい…？」

「バレたらバレたでいいですよ。それではまた…」

「はい…また会いましょう」

記者会見を終えたQ 姫がI Yと別れを告げに来た

「B Y…いや、私が帰国したら、I Yに戻るのでしたね」

「はい」

「私は、この度の来皇で、貴女と言う貴重な存在を知りました」

と言うQ 姫の言葉に、（やはり、私はQ 姫様の研究のサンプルにされましたか…）とI Yが苦笑いをする、

「貴女の生い立ちと街中での生きざまは、私にとって大きな勉強になりました、また私がいつか皇族の席を抜けた時の先輩として貴女を尊敬します」

「…そんな、勿体ない」

「でも、私は暫く皇族の籍を抜けられないことも、また知りました」

「？」

「…だって、私の歌や曲を邪な事に利用する輩が居ることを知りましたので…帰国したら早速この件について対処しますわ」

「そうしてください(笑)」

「貴女とは、これからもいい友達としてお付き合い願いたいわ」

「そんな…勿体なき御言葉」

「あら…私も皇族の籍を抜けたら、貴女と同じ庶民ですわ…その時はお互い対等にお付き

合いましたか？」

「はい、喜んで」

「それから、I Mさんによろしくね！彼女のお陰で歌い続ける勇気が出ました。いつか彼女と同じステージで歌えることを望んでいます」

「はい、必ずI MにQ 姫様の御言葉を伝えます。彼女もその事を望んでいるでしょうから…」

「今度C 国にいらっしゃいな…私が皇族の籍を抜ける前に…国賓…とは流石に行かないでしょうが、私の友人として、C 国の街中をご案内しますわ」

「ありがとうございます」

「では、I Yまた。ごきげんよう！」

「はい、Q 姫様も」

Q 姫はC 国行のチャーター機のタラップを登り、タラップの一番上で手を振ると、機内に消えた。

C 国行のチャーター機は帝都国際空港を飛び立って行った…

帝都国際空港内…

任務を無事終えたI YはB 侯爵と妹のB Kと会っていた。

「Y」

「はい」

「任務ご苦労だった、この度のQ 姫様警護の任務においては、皇王陛下は殊の外お慶びで、皇王陛下自らの賛辞と下賜の品と勲章がお前に送られる事になった」

「良かったですね、姉上様」

B Kが我が事に喜んだ。それを見てI YはB Kに微笑みかけると、B 侯爵に改めて向

き直り、

「父上」

「なにかな？」

「折角の皇王陛下のお申し出、感謝の念に絶えません…しかし、勲章授与の件に関しましては、御辞退致します。その事を皇王陛下に御奏上願います」

「なぜだ？」

I Yの言葉にB侯爵は驚き、

「どうしてですか？姉上様」

B KもI Yを見上げて訊ねた。

「私は、ここでB YからI Yに戻り、またいつもの様にY国際港の白山亭の女給と碓屋エージェントとして、生きていく身です。恐れ多くて…とても勲章を受ける気にはなれません。

それに、この任務は碓屋としてお受けした任務です。私一人の手柄ではありません」

I Yは胸に手を当てて、凜として言った。

「…そうか…」

B侯爵は納得したが、

「えー、姉上様ー」

B Kはまだ納得できない。その妹を諭すようにI YはB Kの視線に合わすようにかがみ、肩に手を置いて、

「K、私はI Yですよ。庶民でいいのです…いずれは私の気持ちや考えが貴女にも理解できる日が来ますよ」

「やだー、姉上様」

納得できないB Kは駄々をこねる。

「聞き分けてください。いいですねK」

I Yは優しく、しかし言葉の芯はしっかりと言った。

「はい」

B KはI Yの言葉にシュンとして返事をした。I YはB 侯爵に向き直ると

「では、父上。私はこれより再びI Yとして日常の生活に戻ります。またKを連れて白山亭に来てくださいね」

と言って、微笑んだ。

「分かった。そうしよう…Y。お前は街中で生きることを選択したのだな」

「はい、父上。私はH G社長と他の姉達と共に生きていきます」

「Y…おいで」

「はい」

B 侯爵はI YとB Kを抱きしめた。

「Y…I Yに戻っても、私の娘だよ」

「父上、ありがとうございます」

I Yの瞳に涙が浮かぶ、そして、B 侯爵から離れると、

「姉上様、またね」

B Kが上目づかいで挨拶すると、I Yは手を軽く振り、

「またね」

I YはB 侯爵と別れて白山亭への帰路についた。

●駄目出し

I Yが任務から戻ってきた晩、母屋の食堂で風呂上がりのI YとT Yが缶ビールを飲みながら、

「I Y、I Aから聞いたけど、あんたI AにQ 姫様に『普段のショッピングとかどこ行つて

るの?』と聞かれて、電話して来たんだって?」

「はい、そうです」

「で、I Aは『途中で切られた!』と言って、怒ってたけど…」

「はあ」

「あんた、I Aに謝った?」

「いえ…」

「ダメだよ、そう言う事は。任務でもバックアップしてくれた人には、お礼を言わないと」

「はい…でも、あの時はI Aは『あくまでわたしの場合だけど、わたしはY国際港街ショッピングモールでタダのウィンドショッピングに決まってるじゃん!』と…それから『そんなに給金貰ってないし!』とも言っていましたので、参考にらないと思いましたので」

「そんなの言い訳だよ。確かにわたしら准尉から小遣い程度の給金しか貰ってないけど、ここ(母屋)の家賃・光熱費・通信費はタダだし、風呂も入り放題だし、制服支給だし…その代わり掃除当番と食事当番があるけど…第一わたしら准尉に弟子入りした身だし」

「いや、給金云々は、私は文句は言いません。タダでもいいですけど…私とH Y先輩は押しかけた身ですから…制服も下のシャツ、ネクタイは自分で買いましたが、上のジャケットと下のスカート・スラックスは春夏用と秋冬用のを2着ずつ頂きましたし。D国製の防弾インナーも支給してくれましたし…」

「じゃナニ?」

「あの時、Q姫様の前で電話したわけではなく、話の途中で中座してトイレに籠って電話していましたので…」

「それも、言い訳! I Aに対しては、H Y先輩が取りなくてくれたけど、I Aにあんたから謝りなさい」

「話の途中で准尉の介入があって…」

「それも、言い訳。I Aは夜の部のP u b営業のシフトで店に居たんだ。准尉もI Yからの電話だから、対応する様にI Aに言ったけど、それがI Aにとっては『准尉はI Yに甘い』と、あんたと准尉に悪い印象持たせているのよ。准尉はあんたが『世間知らずのお嬢様』からまだ世俗に染まり切っていないと知っているから、I Aにそう言ったのだけど、あの子、准尉やT Tさん、H Y先輩と違ってそれが分かって無いんだから…」

「はい、スミマセン」

「謝るのは、I Aにして」

「はい」

「で、Q 姫様には何と答えたの？」

「…私が『普段街中では食料品や日用品等の買い物しかしていません。いわゆるショッピングと言うモノになると、友人や会社の同僚の付き合いでした事しかありませんので…』と伝えると、Q 姫様に呆られました」

「呆れられたの？」

「はい、ただ『それでいい』とおっしゃいました。それから『無理してオシャレな所とか紹介しなくていい』とも…」

「へえ、そういえばあんた、いつも一人で買い物に行く時は、日用品だものね…それにこの商店街（Y 国際港商店街）は、衣類・化粧品・雑貨・食品なんでも揃うし、Y 国際港街ショッピングモールができてから、海外のモノも手に入るし、R 交易商公社に行けば、卸売価格で売ってくれるしね。あんたは帝都でショッピングする時はI Mさんのお付き合いだしね」

「そうですね」

「妹のKちゃんとは？」

「行きませんねえ…任務で妹のショッピングに付き合つたことがあります、プライベ―

トではないですね」

「貴族のお嬢様って、そう言うモノなの？なんか、可哀そうね…わたしは弟や妹達とよく帝都のショッピングモールに行ったり、C Eさんとツーリングしたりしてるけどね」

「ハハ…私が特殊なのかもしれませんが…」

「あんた、リア充じゃないモノね。休みの日とはスティックに訓練してたり、部屋で准尉の本や漫画とか読んでいたり、テレビやビデオを見たりして、ネットとかあまりしないし、行動範囲狭い物ね」

「アハハ(汗)…それは認めます。でも、それはH Y先輩も似たようなものですよ」

「そう？H Y先輩は、港町署の道場で子供達に体術教えたり、商店会とかで近所づきあいを結構しているわよ…わたしやI AやM Pと飲みに行ったり、ドローンやゲームとかでも遊んでくれるし…うくんでも、それを除いたら親父にベッタリくっついて回っているかあ…帝都にも一人で滅多に外出しないし。オバチャンの行動範囲って奴かな？」

「ハハハ…それ、H Y先輩の耳に入ったら、叱られますよ。気づいたら近くで聞き耳立てている事良くありますから…」

「マジッ！」

「もしかすると、テーブルの下に隠れているかもしれませんよ」

「アハハ！あり得るうー」「アハハ！」

「ナンだとうわたしをゴキブリ扱いするなー！」

と言って、隣の居間からH Yの声がした。T YとI Yがそれに驚いた。

「「ホントに居た！」」

「H Y先輩…いつから？」

「わたしは、ここでI Aとサシで飲んでいたのよ。あなた達が飲み始める前から」

「「エッ、I Aも？」」

「そうよ。I Aが『准尉はI Yに甘い』って言っているの、慰めていた所よ」

「ひょっとして、聞いてました？わたし達の会話」

「わたしはね」

「I Aは？」

「ここで酔っ払って寝てるわ…」

とH Yが言うと、T YとI Yはテーブルから立ち上がり、居間を覗き込むと、H Yの膝まぐらでI Aが寝ていた。二人の前のテーブルの上にある缶酒飲料の本数を見て、H Yの酒豪を知っている二人は（H Y先輩お強いから…）と納得した。

「さっき、M Pに布団を敷くように言ったわ。その後で彼女にI Aを部屋に連れて行って貰おうと」

「そうですか」

「M PにI Aを部屋に連れて行って貰ったら、M P含めて4人で飲み直しましょうかあ！わたしの行動範囲について…なあくにが『オバチャンの行動範囲』ですって、なにが『准尉にピッタリくっついて回っている』ですってえー。…そっちは認めるけど…」

とH Yが言うと、T YとI Yは、（ヤバイ！H Y先輩絡み酒になってるう。それから准尉にピッタリくっついて回る事は認めるんだ…）と思って、この後の飲み会を想像して恐怖した。

そこに、M Pが来て

「H Yネエちゃん、布団敷けたヨ」

「ありがとう、すまないけどI A連れて行ってくれない？」

「ハイネ」

と言って、M PはI Aを軽々と、お姫様抱っこをすると、H Yは

「ありがとね、I A寝かせたら飲み直すからM Pもおいで」

「ハイネ」

とニツコリ笑って、2階に上がった。

…翌日、I Yは皆の前でI Aに謝りました。

●エピソード

Q 姫が帰国して数日後、母屋の縁側でパイプ煙草を吹かしながら、

「あゝあ、先日捕まえた奴ら、ウチで絞められればよかったんだけど…港町署に持っていかれてはね」

とR Rが愚痴を言う。

「そもいかんよ…まさか国家公安局のI Sが来るとは思わなかったから…お前の存在隠すのに冷や汗かいたぜ」

H GがR Rに対して申し訳なさそうに言った。それに対して、R Rは

「あれ…お前の誤算か」

「そうだ…I YがI MとKお嬢様を呼んだのでB侯爵秘書のT Kさんが来るまでは読んだのだが…I Sの奴まで来るのは誤算だった…B侯爵がQ姫様の護衛に国家公安局から人を出すと言ったことすっかり忘れてた…スマン（…多分、連中が店に来るのを、I Yに連絡したのを嗅ぎつけられたんだろうなあ…）」

と言って、H Gは申し訳なさそうに頭を掻いた。

「D国大使館の口の悪いパツキンは？」

「あれは、ウチのA M目当てだから、どーにでもなる…あとSちゃんが変な動きしなければ…と思ったが、ちゃんと心得て行動してくれたので助かったよ」

「その意味もあって、俺も店に居たんだが」

「所属する組織は違っても、父親の威厳は強いね」

「ハハハ…ま、臣下として勤めは果たすことができた。感謝するH G」

と言って、R Rは頭を下げた。

「こちらこそ、娘のI Yと実の父親のB侯爵の絆を深めることができたので感謝するよ。皇王陛下からB侯爵様とI Yにお褒めの言葉を賜り、心積もりの品を下賜されたそうだ」

「…お互い娘を持つと苦勞するね」

R Rが苦笑した。

「そうだね…ハハハ。ところで、娘で思い出したが、Sちゃんのお姉さんについてだが…」

そう言つて、H GはR Rを指さして、

「あゝん？」

「Q姫様付きの侍女だろ？」

H Gがシレつと言うと、

「…なんで分かった！」

R Rが目をむいて驚いた。

「I Yの話ではQ姫様付き侍女のR Hさんは、Q姫様が白山亭に行くと仰ったら、治安が良いことを理由にして同行するのを辞退したそうじゃないか…と言う事は、この街をよく知っていると云う事だろ…おとーさんに会ったらまずいと思っただらろ？」

H Gが片方の眉を上げて悪戯っぽく言うと、R Rは観念した様子で

「ハハハ、バレたか…そうだQ姫様付き侍女の正体は俺の長女だ。だから、Q姫様の情報は俺の所に入ってくる。Q姫様もいずれは皇族を離れる。その時に俺らがバックアップしたいと思つてね…娘を付けたんだ」

「おとーさん、大変だね」

「うるせー」

●おまけ…寝づらい夜のIYとHG

熱帯夜…母屋の縁側で、ビールを飲みながらパイプを吸っているHG。そこに、IYが襖の向こうから

「准尉、入ります」

と声をかけた。

「いいぞ」

「失礼します」

HGの部屋に入ったIYの格好は『リア充』と書かれたロングTシャツ（このチョイスはIMによるものです(笑)）一枚の姿。HGがあと30年若かったら、良かったのにも思えるシチュエーション…

HGの横に座ったIYに

「眠れんのか？」

「はい、暑くて…」

と言つて、Tシャツの襟元を持ってパタパタさせる。

「部屋は？クーラーかけているだろう？」

「はい…でも、HY先輩が『寒い！』と文句言うので、あまり温度が下げられません」と言つた。

「…そうか(笑)」

「准尉は、晩酌ですか？」

「ウム」

「私もご相伴させていただいていいですか？」

「ああ、俺の冷蔵庫から数本缶ビール持ってきていいぞ」

「ありがとうございます」

と言って、I Yは嬉しそうに台所へ行く。母屋の冷蔵庫は、所帯が多くなったので、食堂用、HGとHM用、弟子用と別れていて、食堂用には、当然食材。それ以外の冷蔵庫には、お酒やジュース、氷菓子等が入っている。

I Yは缶ビールを持ってくると、

「准尉、いただきます」

と言って、缶ビールを開ける。

「…そう言えば、お前さんこうして飲むのは初めてだな」

とHGが言うと、I Yは暫く考えて

「…そう…ですね。准尉と二人で飲むのは、初めてですね」

「お前さんは、普段誰と酒とか飲んでるんだ？」

「そうですね。IMとUKさん…後はHY先輩とか…」

「IMさんとかとは、外飲みだよな？」

「…いえ、IMのマンションです」

「じゃ、HY達とは？」

「大抵、母屋の食堂とか部屋ですね…」

「外飲みとかは？」

「誰かに着いて行く時しか…」

「一人では飲みに行かないのか…」

「スミマセン」

「いや、謝る事ないが…無理に独りで外飲みしろとも、勧める気はない」

と、HGは方眉を挙げて言った。そして続けて、

「酒は強い方か？」

「…」

黙り込むIYに、HGは（あつ…F県領地の事件の「赤ずきんちゃん作戦」〔巻き込まれ親父の撤退〕参照）“で、シェリー酒一気飲みして酔払っていたっけ”と思い出した。

「ま、酒に飲まれて醜態晒す事がなければ、酒は楽しいものだが」

とHGはつい言うと、

「准尉…それ私の事ですよね」

とIYは目つき鋭く、HGを睨んで言った。

「あつ（しまった！こいつ、以前「お酒はがぶ飲みするところがない」と、自虐していたんだっけ（「巻き込まれ親父の子守唄」参照）」

とHGがたじろぐと、IYは空を見上げて、

「でも、そのおかげで、私はそれまで“死にたい”と思っていた考えを、“生きたい”に変える事が出来て、更に“准尉にもっと色々教えて貰いたい”と生きる目標を見つけて、こうして准尉に弟子入りする事ができました（「巻き込まれ親父の反撃」参照）」

「…そうだったな」

「そして、弟子入りしてから“准尉のお役に立ちたい”と更に考えるようになりました

（「巻き込まれ親父の鎮魂」参照）」

「ああ…」

「私は、お役に立って居ますか？」

と怪しい目でIYはHGを見つめた。

「ああ、十分に。碇屋のエージェントの中でも1, 2位を争う腕前になったし、指名率も稼ぎも多い。ガンスミスの腕もあるしな」

と言うと、日頃、HGがHYを『ウチのナンバー1』と言っているので、

「H Y先輩と私は、どちらが上ですか？」

「うゝん、そうだな。難しいなあ。エージェントとしての腕前は互角だし、ガンスミスも同じか…稼ぎについては、H Yとお前さんのポジションが違うから比較にならんし（I YはI Mからの警護依頼が多いので、碇屋トップの売り上げ）…違いと言えば、身長と年齢くらいかな」

「…それ、H Y先輩が聞いたら、叩かれますよ（笑）」

「あつ、そうだ！もう一つ！」

「？」

「H Yは常に俺を見ている…見張っているのかもしれないが…気づくと傍らにいて、俺が何か考えていると、助言をしてくれる…T Tもそうだが、参謀の役もしてくれる。頼りになる存在だな。それから、最近は他の息子・娘共についても見てくれている」

と言うH GにI Yは（あつ、それ私に一番足りない所かも…）と感じた。

「じゃ、T Tさんとは？」

「T Tは、お前さんも知っている様に、エージェントではなくて、お前さん達のおねえさん役を引き受けてもらっている。エージェントの仕事で息子・娘達が抜けた穴を店のアルバイト達のシフトを立ちどころに組み変えて埋める手腕は、俺には到底真似が出来ん。最初は、パートで小遣い稼ぎ程度の働きをして貰えばいいかと雇ったが、今では俺の参謀として働いてくれている。だから給料も社員のK MとI I並みにしている。これはウチの息子・娘共には出来ないし、比較もできん」

と話すH Gに、I Yは（T Tさんは、親父の補佐に徹している。（H Y）姉さんはまた別の意味で親父を支えているし…私はまだそれが出来ていないなあ…I Mの任務に行ったら、任務が終わっても帰らない不良娘だし…）と感じた。そして、ふとT Tが以前『私、准尉のお嫁さん候補だったそうよ（巻き込まれ親父の膠着）参照』と言った言葉が脳裡に浮かび、

「私でも、准尉のお嫁さん候補になれますか？」

とI Yが唐突に言ったので、H Gは吹き出してしまった。

「な…ナニを言っとる！」

「T Y先輩とは？」

「T Yは、H Yやお前さんと違った方面で優秀だな。俺が民兵会社時代に教えた教え子で、ウチのエージェントになっている中では、一番基礎がしっかりしている。ま、実家が軍人の家系だからと言うのもあるがな」

「そうですね」

「あれで、躊躇癖が無ければいいのだが」

とH Gは頭を掻いた。

「A M先輩とは？」

「A Mは、T Yと同じく基礎ができてはいたが、独断専行しがちで、よく注意したな。会社辞めてから苦労したんだろうな。ウチにフラリと来た時に話を聞いて、色々エージェント向きの経験をしていたので、俺からスカウトした位だからな」

「そうでしたか（A M先輩は、親父が認めた人なんだ）」

とI YはA Mの実力を再認識した。

「じゃ、I Aとは？」

「正直最初は、F子ちゃんに厄介なのを押し付けられた気がした。民兵会社時代の成績も良くなく、目立つ事といえば、ドジばかり…トラックなどの大型免許や大型特殊車両、更に旅客輸送の二種の免許を持っていたので、悩んでいたら、T Yが『わたしが鍛えます』と言う

ので、弟子にしたら、最初は店でカップや皿を割ったり、客の注文を間違える等のドジぶりだったが、今では、アルバイトの女給達を仕切っているし、ガンスミスでは一番の腕前だし、
“特別銃器携帯・使用許可証”も取得に時間がかかったが、今ではお前さん達同様“限定解除”になったしな。それに、発想力があり、思いもよらないことを言うが、それが実はよく的を射ていたり…今では、格闘術を除けば、お前さん方と引けを取らない様に成長したな”
と言うHGに最近のIAの成長ぶりが楽しみになっているのを感じ取り、IYは嫉妬を覚えた。

「では、私が弟子入りするのを何で許してくれたのですか？」

「…うーん、F県領地の事件後のしつこさ…HYが一緒になって弟子入りを言い出さなかったら、考えもしなかった」

「酷い事言いますね」

とIYは顔をしかめた。

「だって、そうだろう…HYは民兵会社時代の長い付き合いがあるが、お前さんとは1年位だ…エージェント派遣会社を起こしたのも、ガンスミスだけでは食べていけないし、白山亭の女給で埋もれさせるのもなあ…二人供、民兵会社時代の成績が最初はダメダメだったのが、みるみる能力を向上して行ったし。そのまま埋もれさせるのも正直勿体ないと思ったからだな」

「そうでしたね(笑)。あの頃の私は性格も暗く、早く死ぬために前線に配置されるには、訓練で優秀な成績を出せば、それだけ危険な戦地に行けると考えていましたので…でも、結果生き残る術も学んでしまいましたね(笑)」

「そうだな、民兵会社時代の接点だけで終わってれば、今頃、俺は白山亭のオーナーとして、毎日コーヒーを淹れている日々だっただろうな。F県領地の事件と言うのがあり、お前

さん達と再度巡り合い、俺の所にあるものは押しかけ、ある者は連れてこられ、またあるものはここに吸い寄せられるように来て、集まった。俺は今でもお前さん達を危険な目に遭わせたくないが、仕事を受けたら、危険な事にならないように注意を払っている。幸い、怪我はあるが、死んだ者がいない事は喜ばしい事だ」

「それで、親父が死にかけたのでは、洒落にならないですね（「巻き込まれ親父の厄災」参照）」

と言うIYに、HGは（…あれ？今こいつ、今俺の事を「親父」と言ったな。ま、軍隊や民兵会社時代なら、叱るところだが、今ではこいつらも家族のようなモノだから、叱る事もないか…民兵会社時代は、俺の事を陰では「親父」とか「パパ」とか言っていたし…少し酔って来たか）とほんのり朱が差しているIYを見て思った。

「言う様になったな。IY」

「ハイ」

と言って、目を細めたIYを見て

「お前さんそうして目を細くすると、「狐」に似ているな。顔が細いから余計な」

「私ですか？」

「うん、民兵会社時代もそうだったが、F県領地の事件の後の弟子入りアピールの時に、お前さんの顔を見て狐を想像した。それに今までの任務で色々化けてくれた」

とHGが言うと、IYは

「（私って、狐なんだ…）それじゃ、他の人達は？動物に例えると」

「HYは「猫」だな。さっきも言ったように、常に俺を見ている。気づくと傍らにいてけど、こちらから近づくと距離を置くことがある。それに丸顔で目を細くすると猫に似ているな」

「そうですね、HY姉さんの様に私も親父の傍らに居てよく観察しないといけませんね…

じゃTTさんは？」

「T Tは“犬”だね。H Yと違い、傍らに居るのを自ら主張して来る。忠犬的な所がある」

「成程、H Y姉さんの“猫”とT Tさんは“犬”ですか…じゃ、T Y姐さんは？」

「T Yは“猿”だな。すばしっこい動きで人を翻弄するところ。あと犬嫌いなところ」

「ですね。棒を持つと、C 国の物語の主人公みたいですね(笑)。ではA M先輩は？」

「A Mは…こいつも“犬”だな。T Tとは違う…ただよく懐いているからイジリ甲斐がある」

「では、I Aは？」

「I Aは、“狸”…連れて来たF子ちゃんが“狸”だから、“小狸”だな。今では化けたな」

「そうですね。確かに化けましたね(笑)。ではM Pは？」

「M Pは“牛”だろうなあ。“赤牛”だな」

「そのまんまですね(笑)。確かに力が強いですから…(笑)。では、I F隊長が“狸”なら、

Y M支部長は？」

「Y M…うーん、Y Mは何だろう？T Tと仲が良いから“犬”になるのかな？」

「じゃ、親父本人は？」

「俺か？俺は“狼”だな」

と即答した。H Gの“狼”にI Yは（あつ、親父の本棚にあった童話の絵本（「巻き込まれ親父の子守唄」参照）…だからか！）と、その童話の主人公の狐が自分でその師匠の狼がH Gになぞらえて納得したことを思い出した。

酒の興で話をしている所で、I Yがふと

「T Kさんは？」

と訊ねると

「“狼”だな…バトルジャンキーな所が特にそうかな」

とH Gが即答した。I YはH GがT Kを『バトルジャンキー』と言ったので、実家に居た時はそんなそぶりも見た事がないので驚いて、思わず立膝の姿勢になった、I YのロングTシヤツの裾から下着が見えた。H Gは、

「I Y」

「ハイ」

「セクシーだぞ！」

とH Gがシレつと言うと、I Yは、自身を見て赤面すると、慌ててロングTシヤツの裾を抑えて、その場に座り込んだ。そしておもむろに

「T Kさんは『バトルジャンキー』なんですか？」

と訊ねると、

「ああ…前に雑居ビルでC国マフィアと撃ち合ったとき（「巻き込まれ親父の邂逅」参照）に感じた」

それを聞いたI Yは（T Kさんは親父と同じ「狼」なんだ…じゃ、T Kさんが親父にアピールしているのも…：実家で親父の事聞かれた時の反応はなんか乙女のような反応だったし…あの人も自分が親父と近いモノを感じているのかな？）と考えた。

「くちゅん！」

「ほら、そんな薄着してるからだ…」

と言って、立ち上がると、部屋の箆笥を開けて

「これでも羽織ってろ！」

「親父、スミマセン」

と言って、I YはH Gから渡されたカーディガンを着ると、何やら不思議そうに袖に手を当ててスンスンと嗅ぎ始めた。

「…なんだ？なにしてる」

「いや…これ、親父の物ですよねえ…」

「？」

「なんか、匂いが…親父と違うので…あゝこれ女物ですね！」

「そうか？あの箆笥から引っ張り出したんだが」

とHGが言うと、IYは

「なんですと、だつ、誰ですか！この部屋に女物のカーディガン置いて居る人って！わつ、私と言う者がないながら…」

と酔って、あられもない事を言い出した。HGは（こいつ、酔うと変な事言い出すな）と呆れて、

「ドアホ！この部屋は、元はひい婆さん、婆さん、叔母さんの居た部屋だ。誰かのだろ？」

「あつ…」

と言って、IYはHGの部屋を見ると、HGの祖母の霊が『羽織って温まりなさい』と言うような仕草をしていた。

「それにしても、可愛いクシヤミするなあゝ」

「やめてください」

と言って、IYは酔った顔を一層赤くした。

「親父、このカーディガン貰っていいですか？」

とIYが訊ねると、HGは

「持ち主がいいと言うなら、貰つとけ。その辺に居るのだろう」

と言ったので、IYはHGの祖母の霊を見ると喜んで頷いていたので、

「では、いただきます」

と言った。

●おまけ…寝づらい夜のH YとH G

「あゝ！I Yこんな所に！」

と言って、H Yが入って来た。

「なんだ、H Y。夜這いか？」

『『夜這いか？』って何ですか！I Yの方が夜這いに来たのではないですか？』

とI Yの格好を指さして、パジャマ姿のH Yが言う。

「俺はI Yと二人で飲んでいるだけだ」

と平然として答えると。

「それとも、わたしが夜這いに来たのが嬉しいですか？」

と得意の上目づかいで言う、

「なにをしょってる！」

H GとH Yの会話を聞いて（親父にとって私は、夜這いに来たとは認識されないんだ。娘と飲んでいる気ではないのかな？）と微妙な心境になった。

「わたしも、飲みます。いいでしょうか？」

と言って、I Yと反対側の位置に座る。

「構わんど、でも程々にな」

とH Gが言った。I Yは（姉さん酒豪だから…笑）と苦笑した。

「では、お酒と肴を持ってまいります」

と言って、H Yは台所に向かった。

やがて、H Yは自分の缶酒飲料と酒のつまみを持参して戻ってきた。H Gと缶を合わせる
と、H Gが

「お前さんともこうして飲むのは久しぶりだな」

「そうですね。民兵会社時代にまで遡りますけどね」

とHYは棘のある言い方をした。それを聞いたIYは（そんな昔？）

「そうなるかな？」

「そうですね。民兵会社時代は、大抵准尉は飲みに行く時は新入社員達やIF隊長とですから」

「お前さん誘っても、なかなか来なかったじゃないか」

「それは、当時はアレでしたし（「巻き込まれ親父の膠着」参照）：准尉の飲み会にはT TやIF隊長がついてきたし：」

と急に口ごもる。IYは（あつ：姉さん、あの頃は）と思い出した。

「お前さんが酒豪だと言う話って、確か同期の連中から聞いたと記憶しているが：部屋に遊びに行ったら、ワンルームの机の足元に何本もの酒瓶が転がっていたと：」

「やめて〜」

と言って、HYは耳を塞いだ。それを聞いてIYは苦笑した。そんなHYの肩にHGは手を置いて、

「ウチに来て、話を聞いてようやく気付いたが、あの時は、気分を紛らわせようと、酒に溺れていたんだな」

「：ハイ」

「その時の酒は美味しくなかったろう：」

「はい、そうでしたね。ただ酔っ払って忘れようと必死でしたね」

「今は、どうだ？」

「はい、母屋でIYと飲んだり、外でTY達やMS達と外で飲んだりしますが、今では楽しく、美味しく頂いています」

「良かったな」

「ハイ！」

とH Yは明るく返事をした。

「…ところで、准尉は何を飲まれていますか？」

と言って、H YはH Gの持っている缶の銘柄を訊ねる。

「これか？A国のマイナーなビール。以前A Mが勧めていたのを先日 “酒屋（屋号、Y港町商店街に居るH Gの親戚の酒屋）” が入荷したと言って持ってきた」

「珍しいですね。一口くれませんか？」

「いいぞ」

と言って、H GがH Y持っているビールの缶を渡す。それを何の気兼ねなくH Yは口を付ける。それを見たI Yは（あつ、間接キッス…）と驚いた。

「お、親父…それに姉さん…」

「何だ？」「ナニ」

「それって…」

とI Yが指さすと、H GとH Yは顔を見合わせて、

「別にいいじゃない。間接キスだろうが何だろうが…別に悪い病氣持つてる訳じゃないし」

とH Yはシレつと言った。呆氣にとられているI Yに

「戦場ではよくある事だったし、今に始まった事じゃないわ」

「えっ？戦場ではよくあった事なんですか？」

「そうよ、戦場では水筒の回し飲みや、一つの飯盒でご飯やおかずを突きあつたり、カラトリを融通し合ったりするのは、よくある事よ」

と平然として言うH YにH Gも頷く。戦場経験が無かったI Yは（私は、そう言う経験はなかった…）と考えた。そして「親父、私も」と言ったが、自分の持っているビール缶がH G

と同じ缶（I YはH Gの冷蔵庫からビールを持ってきました）である事に気づき、（失敗した！）と落ち込んだ。それ同時に（先程、親父は姉さんを『猫』に例えていたけど、本当にそうね）と思った。

「では、親父は他の女の人とも？」

とI Yはまた変な質問をした。再びH GとH Yは顔を見合わせて

「あら…あなたの身近な所で言えば、O県領地の漁港で准尉が海軍基地からサンドウィッチを貰って来た時、皆紅茶のコップを回し飲みしてたでしょ？准尉とI F隊長がそうしていたし（『巻き込まれ親父の反撃』参照）」

と言うと、H Gは（こいつ…よく見ているな）と内心呆れた。

「…いえ、私は自分のコップを確保していたので…」

「それから、わたしは准尉とT TとF県領地の温泉宿で、准尉の持っていた高級ブランデーの入ったスキットルを回し飲みしたし（『巻き込まれ親父の撤退』参照）」

と得意げに言うと、I Yは

「なんですと？」

と驚いた。

「…そう言えば、さっきI Yとの会話で、わたしの事『猫』と言っていましたか？」

とH Yが話題を切り替えると、H Gは（聞いていたな…）と思い、

「そんなところだよ…、俺をいつも観察している。そして、今も俺の傍らにチョココンと座っている所だ」

とH GはH Yを指さして言うと、H Yは自分の周囲を見回し

「あら…やだ。本当ですね」

と言った。それを聞いたI Yは（無意識だったんですか！）と突っ込みを入れた。

「ま、ここに来てかれこれ数年経つが、こうして3人で飲みながら話をした事がないな（巻き込まれ親父の鎮魂」参照）」

「はい」

「ここにきてから、色々あって、じっくり話をする事が無かったですね」

とH Yが言うと、I Yも頷いた。それを見たH Gは、

「こうして飲めるのも、何かの縁だが…お前さん達が押しかけてこなければ実現できなかったな」

としみじみ言うと、H YとI Yは目を細めて、

「はい」「そうですね」

と返事をした。その後、H Yがおもむろに

「あの、先程の話ですが…」

「なんだ？」

「I Yを『狐』、わたしを『猫』と言っていました…、T Tは『犬』ですか？」

と、H Yが訊ねると（こいつ…いつから、聞いていたんだ？）とH Gはドン引きした。

「H Y！」

「ハイ！」

「いつから、聞いていた？正直に言え！」

とH Gが尋問口調で言うと、H Yは身を正して、

「ハッ、I Yが准尉の冷蔵庫からビールを持ち出した時からです」

「…そんなに？」「なんですと！」

と言って（ほぼ最初からじゃん！）と二人は仰天した。

「はい、目が覚めたら、I Yが部屋に居なかったので、トイレか何かと思い、わたしはもう少し飲みたくなって、食堂に降りてきたら、I Yが准尉のビールをくすねたのを見かけて、

羨まし…もとい！怪しんで見張っていました」

「で？」

「I Yが准尉と飲み始めたので、ビールは准尉が許可したものと安心しましたが、会話が耳に入って来たので…その盗み聞きしていました」

と言つて、H Yは申し訳なさそうに俯いた。

「あゝそうかい！よく、正直に話してくれた」

とH Gは開き直つて言うと、H Yは

「どうも、すみませんでした」

と言つて、頭を下げたので、

「分つた。これをやるから飲め」

と言つて、H Gは真新しい缶ビールをH Yに渡した。

「ありがとうございます」

と、得意の上目遣いで受け取った。それを見たI Yは（姉さん…あざといです）と突っ込んだ。

「で、T Tは“犬”じゃなければ、お前さんはどう思ってる？」

「T Tの方がI Yより“狐”だと思います」

「なんで？」

「I Yと同じく、細面ですし（「見た目だけかい！」とH Gが突っ込む）、私達を遠くから見守っている？…と言うか見ているところとか…（「それって、H Y姉さんも同じです」とI Yが突っ込む）化かしているところ…」

と言ったH Yに、

「「ど」が？」

とH GとI Yが突っ込む。何度も突っ込みを入れたH Yはムキになって

「だって、親父の奥さんに良く間違われるんだもん！」

と叫ぶ様に言うと、I Yは妙に納得し、H Gは（単に嫉妬してるなあ）と思った。そして（こいつも、俺の事“親父”と言いだしたな…）と思った。

「でも…M ZさんやT Kさんに対してあからさまな敵意とか嫉妬を見せる所は、やはり“犬”でしょうか…（「巻き込まれ親父の邂逅」参照）」

とH Yが言い終えると（やはり、“犬”でいいじゃないか）とH GとI Yは思った。

「T Tが親父のお嫁さん候補だったのは、当時准尉の上司である顧問から聞いていました」と言うH Yに（姉さん知ってたんだ！）とI Yが驚いた。

「…それでか！ F県領地の事件の時に、お前さんがT Tに気兼ねしていたのは…O県領地でT Tを家に返した後に俺にべったり着いて回っていたのは！（「巻き込まれ親父の撤退」

「巻き込まれ親父の反撃」参照）」

と呆れて言うH Gに

「はい、そうですが。何か？」

と酔った勢いで言い放つH Yに（…こいつ、開き直ったな！）とH Gは思った。

「妬けるか？」

「「ハイ！」」

とH YとI Yが同時に返事をした。

「チヨ…まで、H Yに聞いたが、I Yお前さんには聞いてないぞ」

「私だって、T Tさんや姉さんに嫉妬します」

と言った。H Gは（…俺って今更モテ気かあ？）と一人よがりをした。

「チョット！ I Y…なんであなたが、嫉妬するの？」

とH Yが驚いた。そして、I Yの顔を覗き込み、

「I Y…酔ってる？」

「ハイ、酔っているから、自分の気持ちに正直です。私も親父が好きです」

「まあ、あなたの場合は、実家でも父親の愛情が注がれていないようだから、愛情に飢えていて、親父に対して父性愛から勘違いの恋愛感情を持つからね（「巻き込まれ親父の子守唄」参照）」

とH Yが高飛車に言うのと、

「姉さんだって、実の父親に幼い時に死に別れて、義理の父や兄に酷い目にあったから、親父に対して父性愛の他に恋愛感情を持つのですよね（「巻き込まれ親父の膠着」参照）」
とI Yも負けじと言い返す。

「なんですってー」

とH YとI Yがまた、取っ組み合いの喧嘩でも始めそうなので（「巻き込まれ親父の狙撃」参照）、間に居るH Gは

「待ちなさい！落ち着け。二人供…お前さん達が、俺に…そのなんだな…父性愛と恋愛感情を持つてくれるのは、大変うれしい。俺があと、20年…いや10年若ければダナ」

とH Gが宥める様に言うと、H YとI Yは

「「そんな事ありません！今の親父が良いです！！！」」

と言った。H Gがドン引きすると、H YはH Gに身を乗り出し、

「だって、親父はわたし達の「死にたい」願望から救ってくれた人ですから、その恩に報いるのなら、なんだってします」「私もです」

「あのお、俺、新興宗教の教祖じゃないから…皆、自己を持ってだな…」

とタジタジになりながら言ったH Gに（あつ…親父の説教モードになった）とH Yは引いたが、I Yは

「いいえ、親父は私を「買って」くれたので、親父のモノです…」

とF県領地の事件の後、H Gに弟子入りを詰め寄った時の様に言った。

「ば、馬鹿者！俺が買ったのは、お前さんの能力だ」

「いいえ、今では身も心もです！」

と言って、I YはH Gに詰め寄った。H Gは（こいつ、完全に酔払ってるな）とすっかり赤ら顔のI Yに戸惑っていると、

「わたしも負けません！親父の傍らにいつまでもついていきます」

とH Yも負けずに言う。H Gは困って

「…それって、死んでも俺に付きまとうのか？」

「はい、背後霊になってついて行きます！」「わ、私もです！」

「どう考えても、俺の方が先に死ぬぞ」

「…それは、困ります！」

「あゝもう、勘弁してくれ！」

と言って、H Gは頭を抱えた。

「…そう言えば、親父」

「な、なんだ？」

「I Yが来ているカーディガン…それって、誰のです？」

と先程H GがI Yに渡したカーディガンに話題を移した。

「これは、そのの筆筒から…」

とH Gが言うと、

「エッ？誰のですか！女物のカーディガンなんて…親父、女装趣味でも？」

と言って騒いだが、H GとI Yは

「「わざとらしい（ぞ）（です）」

「エへへ…バレましたか」

と言って、舌を出した。

「そりや、さっきの話から、俺がI Yにカーディガンを渡すのも見ていただろう？お前も欲しいのか？」

「ハイ！是非にでも！！」

「だったら、その箆笥から好きなの選べ」

とH Gが言うと、H Yは膨れて

「エー、I Yには自ら渡して、わたしには箆笥をあされと？」

「そうだ」

「ヤダー、親父自ら選んでくださいよう」

とH Yは急に甘ったれる。

「ハイハイ…仕方ねえな。これでどうだ？」

と言って、箆笥の引き出しから、別のカーディガンを出して渡した。

「わーい」

と言って、H Yは早速カーディガンを羽織った。

H Yがカーディガンを羽織って喜んでいるのを見ているH Gの肩に急に重みを感じた。

見ると、I Yが酔っ払ってH Gにもたれかかって寝ていた。H Gの肩越しにI Yを見たH Yは、

「…あらあら、I Y寝ちゃいましたね」

「そうだな」

「幸せそうな寝顔して、こうしてみるとホントに『狐』に似てますね…でも、どうします？」

「いい顔して寝ているから、起こすのも可哀想だな…さりとて、背負って2階の部屋に上が

るのも、俺もそこそこ酔ってるし…」

「そうですね」

「仕方がない、そこに敷いてある俺の布団に寝かそう」

と言って、H GはI Yを引きずって自分の布団に寝かせた。

「親父は？」

と心配そうに訊ねるH Yに、

「隣の居間で寝るさ…熱いから、布団なしでも大丈夫だろう」

と言って、H Gは肩の辺りに両手を挙げて肩をすくめる。

「そうですか」

「お前さんも、もう寝ろ」

「はい、おやすみなさい」

翌朝、母屋玄関…

「さあて、今日は棒術の練習だ！」

「はいな姐さん」

とT YとI Aはトレーナー姿で玄関に出るが、いつもは既に庭に居るH GとH YとI Yの姿が見えない…

「あれ？おかしいな」

と見回していると、男屋からA Mがトレーナー姿で出てきて、

「T Y先輩、ハヨっス！」

「あ、A Mおはよう」

「あれ？准尉とH Y姐さん…あとI Yは？」

「うん、まだ起きてきてないようだね」

「なんか、夜中に准尉とH Y姐さんとI Yの声が母屋から賑やかに聞こえていましたけど…」

とA Mが言うと、

「…そうなの？ 准尉達部屋で飲んでいたのかな？ I A ちょっと見てきて」

「はいな姐さん」

と言つて、I Aが母屋の玄関に戻る。

暫くして母屋からI Aの絶叫が聞こえて来た。

「ナニ？」

「何かありましたかね。T Y先輩」

「とにかく、見に行くよ。A M」

「ハイ」

T YとA Mが慌てて母屋の玄関から上がる。居間に行くと、そこには居間で倒れているH Gと隣のH Gの部屋の襖を開けて硬直しているロングTシャツにカーディガンを羽織っているI Y…食堂には、腰をぬかしてI Yを指さしているI A…

「どうしたの？ I A」

「あっ…アワアワ…I Yが、I Yが…」

「えっ、I Yが准尉を殺したの？」

「…じゃなくて…」

と言うつと、

「チョット、どいて…」

と言つて、台所に居たH Gの姪で看護師のH MがH Gの傍らに行つて、呼吸を確認する。

「うわッ、酒くさ！」

「「エッ?」」

続いて、H Mが脈をとると、

「…なんだ、フツ―に酔っ払って寝てる…」

と脈を取った腕を乱暴に放り出す。

「「良かった―」」

と一同安心した。

「一体、どういう状況? I A」

「はい…あたしが食堂から居間に入ろうとしたら、居間に准尉が倒れていて、生きているかを確認しようとしたら、准尉の部屋からI Yがああ格好で出てきて…」

「これって、I Yが准尉を夜這いしたのかも…」

とT Yが言うと、I Yは頭を振って、

「違います! 私は目が覚めたら、准尉の布団で寝ていて…」

「やっぱり、夜這い? それとも、准尉に襲われた?」

「違います! やめてください!! A M先輩まで…」

「ナニ? どしたの?」

と言ってH Yが食堂に入ってくると、

「あつ、H Y姉さん…I Yが…」

「エッ、何かあったの?」

T Y・I A「親父に夜這いした!」、A M「親父に襲われた!」

とそれぞれ言うので、H Yは昨晚の事を思い出し、

「昨日は、わたしとI Yで親父の部屋に押しかけて、遅くまで飲んでいたわよ!」

「「それで？」」

「I Yが先に寝ちゃって、仕方ないから、准尉が自分の布団にI Y寝かせて、居間で寝るって言ってたわよ」

とため息混じりに言った。

「「な〜んだ…」」

と、一同安堵したタイミングでH Gの目が覚めた。

「な、なんだ皆揃って…？」

と自分を囲むように居る、皆に驚いていると、

「「この親父！」」

∴MPは部屋で寝ています(笑)作者

「巻き込まれ親父の憂鬱
|| 完 ||」